家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

10

第八十四巻　第十号　日本幼稚園協会

幼児の世界をさぐる

●その心理と行動の秘密●

子どもの世界が目のまえに広がる、全く新しい保育の手引書。

東京工業大学教授
坂元 昂・著

ＮＨＫテレビで10回にわたり放映され、好評を博した「おかあさんの勉強室」（講師・坂元昂）をさらにやさしく書き直し、一冊の本にまとめました。幼児のものの見方、考え方、話し方、学び方など、豊富なイラストと写真でおもしろく、わかりやすく構成されています。プロの保育者にとっても、保育上の手引となる絶対の良書です。

Ｂ６判・216頁・定価 1,200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第八十四巻　第十号

幼児の教育　目次

――第八十四巻　第10号――

ロシアの村の教会で……牛島　義友（4）

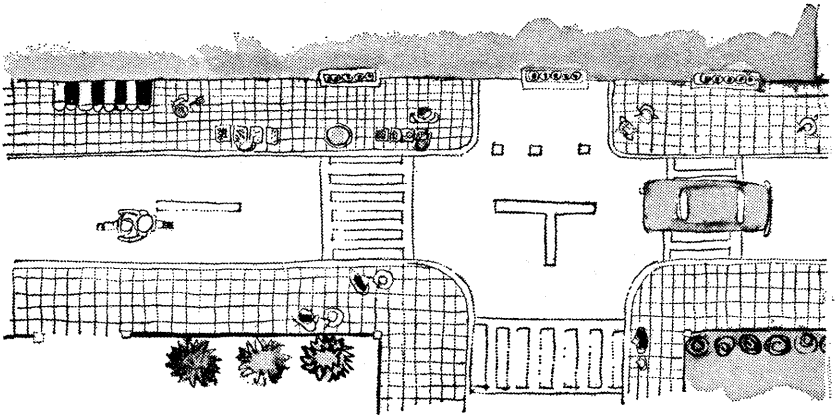
カナダ・アメリカの旅2
保育の理論と実践を求めて……津守　真（8）

SF的読み解き　子どもという風景
第八回「もしも……」のいろいろ……堀内　守（16）

子どもたちのこと……大橋利恵子（25）

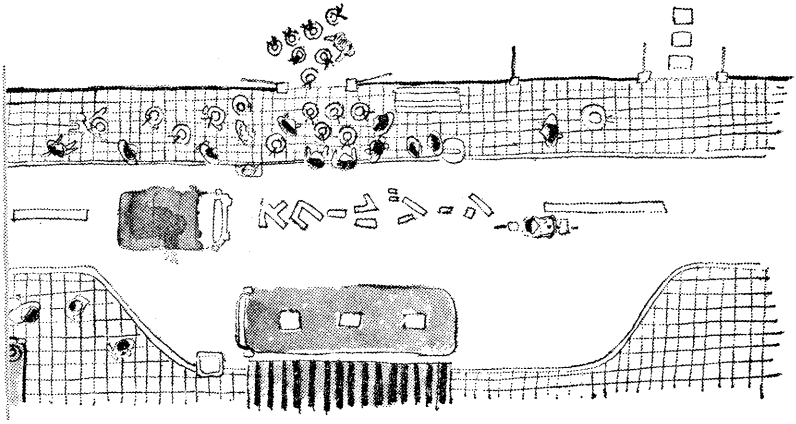
17世紀オランダ絵画における子供……堤　委子（28）

© 1985
日本幼稚園協会



私の造形教育……福田　理恵(35)
私の見たインドネシアの幼稚園と子どもたち(後編)……近藤伊津子(38)
保育の中の小さなこと、大切なこと……守永　英子(45)
兎園随筆⑭『実習生』……蕪木　寿江(48)
ふたりでるすばん……矢崎　淳子(52)
若いお母さんたちへ　はるにれの会……佐野　恵子(56)

表紙絵・『ヨーロッパのきりがみと影絵』(岩崎美術社刊)より
カット・福田理恵



ロシヤの村の教会で

牛島　義友

私はこの六月、二週間位ソ連を訪問する事ができた。その中の二、三の風景を書く。

キエフから飛行機で一時間五十分位でミネラールヌイエという空港についた。これはミネラルウォーターの意味である。ウクライナから黒海までずっと平原がつづき、ここからコーカサス山脈がはじまるが、この前山は火山性で一千から一千数百メートルの山々が点在し、この山麓から鉱泉が湧く。これが病に効くというので革命前から保養地であったが、今日多くのサナトリウムが設立されている。ここに四泊して農村の教会に案内された。最初に行った教会はコサックの部落にある木造の教会で百五十年位経っており、農民らの移住にしたがって移築されたそうである。一行がバスを降り教会の門を入ろうとするや、教

会の長老と思われる老人が非常に大きく丸いパンを両手で捧げ持っておられ、そのパンの上にある塩を来訪者の代表がパンの上にふりかける。このパンは心からの歓迎のしるしである。堂の中には大勢の信徒、婦人達が集まり、われわれに一人ずつバラの花を渡される。礼拝の日でもないのにわざわざ集まって下さったらしく、親切でこっちの挨拶の話も喜んで聞いて下さった。言葉は通じなくともその態度により、純朴なホスピタリティとその背後の敬虔な信仰がうかがわれた。この村には神父さんは一人である。ロシアの農家はせいぜい、十六坪位のもので、庭もせまく、垣なども粗末で豊かとは思えない。ここの老人達は激しい労働の中で信仰を保ちつづけておるようである。

その次の日訪れた教会は一度飛行場まで戻り、さらに十数キロ行った所にある教会で、自動車が高速で走る公道を離れ、村道に入ると、前日の雨でできた水たまりの中には沢山のあひるが遊んでいて、それを追いながら徐行して進行した。一寸行った村の外れに教会がある。まず前述の丸パンの歓迎を受け、やはり心からの歓迎を受け、言葉は通じなくとも強く握手される。ここでは老神父が司教されているが、鐘つきなど手伝っている青年がルパシカを着ているのが珍しい。ルパシカは街では着ている人なく、店にも見当らず、ここではじめて見たのである。また教会の中に可愛い、十歳以下の娘さんが二人、目についた。神父さんのお孫さんで、あとで神父さんの家で昼食を頂いた時も一しょについてきて室の隅におられた。一行の中の婦人が折紙で鶴を折ってあげたら一心に見ていたが、われわれが食事中、床に坐って折紙を始めた。非常に正確に器用な折り方でチューリップの花

を作り、客の全員にあげたいと思ってか、熱心に折りつづけ、沢山のチューリップができた。この手つき、動作は日本の子供よりも器用で賢そうであり、人を喜ばそうとの好意にあふれていた。

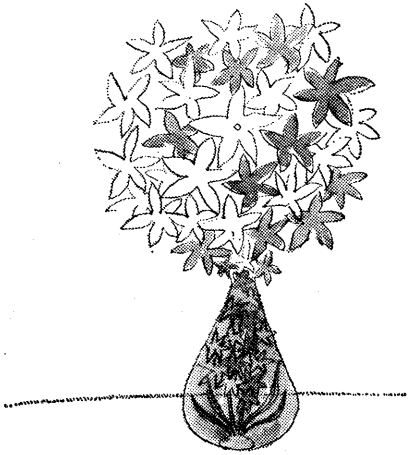
先ほどの丸パンも割って食卓に供されたがフンワリとやわらかく、美味しく、他の御馳走が沢山で、今は食べ切れないけど折角だから頂いて帰ると持ちかえられた婦人もあった。

ある神父さんのお家の招待

この家は平家建てで、門を入って玄関のそばの客間は、細長い八畳位で全員が席につくともう余裕もない位だが、食卓にはきれいなクロスの上に沢山の料理が一ぱい並べられた。神父さんは自分はコーカサス人だからコーカサス式でやると、まず直径三十糎位の丸いパンをうすく焼いたものを三段重ねた、風変りなパンに自からナイフを入れられた。前菜には野菜や果物が多く、トマト、キュウリの他に、オリーヴとか、ナスに野菜を詰めて焼いたものなど、またチーズ、サーモンもあり、ミネラルウォーター、ジュースの他に、ウォッカ、コニャックなど飲物もいろいろである。スープも野菜のと肉のと好きな方をとれるが、それぞれ満腹。つづいて肉の揚げ物の大皿、魚の皿などもう手を出す者もない。最後には大変大きなケーキがデザートとして供され、奥さんがまずナイフで中央に丸く切り目を入れてから、外側を放射状に切り分けられた。大変美味しいのだが、ほんの少ししか頂けない位であった。これだけの料理を作り、ケーキまで焼くのが、皆、奥さんとその

妹さん、お手伝いによる手作りなのであるが、その腕前も大したものであった。ロシアの主婦たちのドメスティックな才能には敬服した。また神父さんと奥さん、妹さん、坊ちゃんとで合唱して下さったが、誠に見事なもので、特に妹さんのソプラノは立派で、神父さんはバス。もっともこの妹さんはプロの歌手を志しておられる由で、また奥さんもクロィアーを坊ちゃん方と一しょに助けておられるそうである。家庭でこのような教養の深さと、暖かい雰囲気は驚きであった。この中で子供の教育に努力されておる訳である。

他でも父上も神父というある神父の御子息が二人共、今神学を勉強中というお宅もあり、ロシア正教の伝統がこのようにして保ちつづけておる面を知った。



（元九州大学教授）

カナダ・アメリカの旅　2

保育の理論と実践を求めて

津守　真

一九六〇年代後半から七〇年代は、知的教育をめぐるさまざまなプログラムが幼児教育に導入された時代であった。行動主義の心理学と教育学の考え方が教育界を蔽っていたころ、更にそれ以前の時期から、ヨーロッパでは、自然科学の方法論ではない、独自の精神科学に基づいた教育学の流れがあった。ランゲフェルト、ボルノウらは、この時代を通じて、その主張を貫いていた。これらの人々は、それぞれ独自の学風を形成していたが、ひとつの学会や組織をつくることをしなかった。その考え方の根底自体が、外的規準やドグマに従うのではなく、子どもと大人、人間相互の内的理解を深めてゆくことにあるから、組織に依存することへの抵抗感があったのではないかと思う。それにもかかわらず、これらの学風の中で育った人たちが、今回、カナダのエドモントンで四

回目の会合をした。オランダやドイツから中堅の学者が集まり、アメリカのいくつかの大学、及び、カナダ全土から参集者があり、百人足らずの、互いに知り合うのに丁度よいサイズの集まりであった。個人の発言も一人四十分ずつ与えられるので、かなり十分に話すことができる。しかも、自分だけが最先端の抜きんでた研究を発表しようとするのではなく、人間に共通の課題について、互いに考えていることの理解を深めようとする態度が、落着いた雰囲気をつくり出していた。その会合での収穫を心の中に温めながら、五日間の会合を終えて、翌朝の早い飛行機でシカゴに向った。

シカゴ

青い空に夏の太陽の輝やくひろびろとしたカナダから、シカゴのダウンタウンのホテルに着いたとき、ホテルそのものは立派なのだが、埃をかぶったような古い煉瓦の建物の街並み、忙しく事務的な人々の応対に、現代の都市の緊張を覚えた。私共がシカゴに立寄ったのは、ベッテルハイムの障害児の学校を訪問したいとかねがね思っていたからである。「うつろな砦」（みすず書房）「愛だけでは十分ではない」（誠信書房）など、ベッテルハイムの著書は実践の問題と深くかかわっている。ことに、A Home for Heart には、彼の学校の運営の仕方及び、具体的なことに当っての彼の哲学が記されていて、現在の私には、参考になることが多かった。ベッテルハイムはすでに八十歳をこえており、十年前に隠退してここにはおられないことは分っていたが、あらかじめ、現在の校長のジャキイ・サンダースに手紙で訪問の約束をしておいたのである。

ダウンタウンから、バスで、ステートストリートを真直ぐ南に五十五番街ガーフィールドで乗換える。その間約三十分間、広い道路の両側は、古い煉瓦やコンクリートの建物で、半分壊れたり、窓ガラスが破れたりしているものが多い。二十世紀の前半までは繁栄していたのであろう倉庫やビルの立ち並んだ街路には、人影も見えず、荒涼とした印象を受ける。丁度五月二十七日は米国

のメモリアルデーのせいもあったのかもしれないが、バスは数人の黒人と私共だけで、座席は布も張ってない板張りで、窓枠が風にあおられて音を立てた。バスを乗換えて間もなくシカゴ大学のキャンパスにはいる。緑の芝生は広く、その間にまばらに立つ建物はひとつひとつ立派である。キャンパスの外縁をなす帯のように広い芝生から、幅広い道路を隔てて、大きめの個人の家のような建物が立ち並ぶ。シカゴ大学付属ソニア、シャンクマン、オーソジェニックスクールは、その中のひとつである。そこからシカゴ大学を眺めると、ゴシック風の古典的な大学の建物の集まりが偉観である。さすがに歴史的に意義のあるこの大学が、現代都市シカゴの変貌の中を、どっしりと生きのびていることを感じさせられる。

私共を待っていてくれた若い女性のスタッフが、玄関わきの応接室に案内してくれた。部屋の隅にはミニハウスがあり、棚の上には飾り物などが並べてある。ここが入学希望者と最初に面接する部分である。子どもが最初に学校の中を全部見てまわって、両者がそれでよいと思えば入学することになる。その出発点はこの応接室である。この学校は障害児の学校で寄宿舎がついている。ベッテルハイムのいたころには、六歳から二十六歳と年齢の幅があったが、現在は十六歳から二十五歳と変化してきているという。障害児の学校は高年齢化する傾向があるが、その理由だけではなく、学校の性格が変化してきているように思えた。社会や制度の変化は、ひとつの学校の性格をかえてゆくのだろう。愛育養護学校は、二歳位から十三、四歳で、すべて家庭からの通学だから、学校の性格としてはことは非常に違っている。しかし、学校が子どもを選択するのではなく、子どもが学校を選び、その子どもが快く過せるように環境をつくるという考え方においては共通である。

生徒たちは昼間は教室にいっており、その留守に建物の内部を案内してもらった。かなり広い居室の壁際に、五つほどベッドがおいてある。枕元の壁には、それぞれ好きなシールなどが貼ってあり、ぬいぐるみがふとんにいれてある。中央に低いテーブルがあり、一緒に集まる

こともできる。入口に近いところの壁に、鍵のかかるドアのついた戸棚があり、その中には薬品などが入っている。廊下にはキッチンと言って、鍵でドアをあけると壁面に流しとガス台があらわれる。迷路のように階段を昇ったり降りたり、ドアを開けたり閉めたりして、同じような部屋をいくつも案内してもらう。上階には昔のチャペルを改造した集会室がある。ベッテルハイムの書物によれば、障害児の学校には、魂に安らぎを与える空間が必要であり、改造のときにチャペルを保存することにしたのだという。もうひとつの集会室からは中庭に出ることができる。寒い気候の地方でもあり、石造りの頑丈な建物は外界から隔絶するかのようである。日本の幼稚園や私共の学校のように外に向って開かれた明るさには欠けるように思えた。このことは、私共とは比較にならないほどの、この学校の負っている生活の重さにもよるのだと思う。知能の遅れはひどくないけれども、親から拒否され、精神的重荷を負っているのがここの子どもたちである。建物の中を案内してもらってから、この学校に長く勤めているという女性のソーシャルワーカーが、私共のために一時間以上も時間をさいて、スタッフがミーティングの部屋でいろいろと話してくれた。この部屋で、もう何十年間も毎日ミーティングが行われているという。ベッテルハイムの著書にあらわれる彼とスタッフとの間のきめこまかな、ときには厳しい対話はここで行われてきた。昨年、ベッテルハイムはこの学校を訪れたが、彼がいたころの子どもたちはすでに去り、スタッフも半分以上いれかわっていて、自分たち古いスタッフは寂しい思いをしたとこの人は語ってくれた。

帰りがけに玄関に向う階段は、一見あたりまえの階段であるが、子どもにとっては、その一段一段が、天国へ導びくものであったり、地獄へと墜落する思いを抱かせるとベッテルハイムは書いている。その階段の両側の壁には、天地創造の混沌の有様や、天空の銀河、人間の労働などが描かれており、踊り場には、神話の動物、ユニコーンとフェニックスが描かれている。真の愛に出会ったときに自らの意志によって自己を放棄する一角獣ユニ

コーンと、自分の身体を焼かれた灰の中から再生する不死鳥フェニックスである。これは、自由意志によって以前の存在を脱ぎすてて、よりよい新しい存在を獲得するこの学校のシンボルである。

ベッテルハイムは、ユダヤ系ドイツ人であり、第二次世界大戦のとき、アウシュヴィツの収容所から奇蹟的に脱出し、一九三九年、アメリカに移住した。この学校は亡命の学者にふさわしい場所であったのかもしれない。彼の症例報告に出てくるローリーが、乾ぶどうを自分の指で一粒ずつつまんではじめて口にいれる。そのベッドの傍に夜ごと、何時間も一緒に腰かけて遊ぶこの人の姿が目に浮ぶ。現在は、この同じベッドの傍で、他の若い研究者が同じように時を過しているのだろう。訓練や教育のプログラムの実施ではない、ひとりの子どもと心を通い合わせる孤独な実践は、ことごとくは文字になり得ない。この学校から受ける重苦しい印象は、社会から受けいれられないこの子どもたちの生の重さなのか、それを日々負うスタッフたちの重さなのか、このような子どもたちを生み出す社会の重さの故か。この学校のスタッフたちに尊敬の念を抱きつつ辞した。学校の性格は幼稚園とは異るが、ひとりひとりの子どもの内心の要求にこたえなければ一日として過せない点において、すべての教育の原点を指し示しているのだと思う。帰路のタクシーでグリーンベルトの間のハイウェイを、忽ちに、この都市の荒廃部分を見ることもなく、ダウンタウンに到着した。

倉橋惣三の『幼稚園雑草』には、シカゴ大学付属幼稚園訪問記がある。それは今世紀のはじめの繁栄の頂点にあったシカゴである。

ミネアポリス

カナダ、アメリカにくると、私はいつもミネアポリスに立寄らないではいられない。ここは三十数年前に二年間勉強していた土地で、故郷に帰ったような気がする。かつてお世話になっていた家の、二階の同じ部分に泊り、老齢になられたが、今なお元気に私共を迎えて下さ

るN氏夫妻と朝食を共にすると、長い年月はなかったかのように感じてしまう。到着して翌日は、大勢の友人が寄ってくれた。今回は四度目であるが、妻と一緒に来たのは初めてなので格別である。

N氏の家に私が住んでいたころ、私によく馴ついて、私と一緒でなければベッドに寝にいかないといって泣いた三歳のメアリアンは、十年以上前に結婚して、前回の訪問のときには一歳半の子どもがいた。私が床の上に坐りこんで遊んでいると、自分が小さいときと同じようだといって笑った。このメアリアンが、今回は四人の子どもをつれてあらわれた。一番下の女の子が小学校四年生で、上の子ども三人が小学校六年生だという。三人同年齢とはどうしてかと驚くと、そのうち二人は韓国の戦争孤児を養子にしたのだという。四人の子どもたちは、小犬のように走りこんできて、見るからに快活で幸せそうで、この一家と共に過した時間は、今回の私共の旅行で、最も楽しいときだった。メアリアンは小柄な身体にエネルギーを漲らせて、ひとりひとりの子どもに心を配って世話をしていた。韓国から引取ったのは五歳の時であるが、アメリカに着いたときには英語もしゃべれず、居間の椅子に腰かけて身動きもしないで、予め送られていたその家の写真と実物とを見比べていたという。本当にこれが実在する現実なのかと自らの中に確かめていたのだろう。数日後には学校に通いはじめ、家族の一員として、また社会からも温かく迎えいれられていることを感じてから、たちまち他の子どもさんと同じようになったとN氏夫妻は私共に話してくれた。N氏夫妻には実子がなく、メアリアン自身も、三歳のときにこの家に養女として来たのである。それにしても、他国の孤児を養子にする度量には感心する。この日は丁度そのうちのひとりの子どもの誕生日で、N氏夫人は誕生祝にとキムチの瓶詰を買ってきた。大人も子どももすべてを承知の上で、親子関係を形成している。子どもの期間を大人が預かって、必要としている物質と精神を与えようという考えである。私共が帰るとき、この子どもたちは、首にしがみついてキスして、大きくなって韓国に帰る途中、私

共の家に立寄るからといった。

ミネアポリスに滞在中に、私は大学時代の一人の友人が、今回は会えないが、と電話をかけてきた。彼女も四人の子どもがいるという。最年少が二十三歳で、最年長が二十八歳とのことで、たずねると、そのうち二人は東南アジアの子どもを引取ったのだという。西洋では十八歳をこえると、親の家に留まることは少ないから、この人たちはそれぞれに自分の道を歩みはじめているのだろう。電話口で屈託なく笑う声は、大学時代とかわらず明るかった。

家庭のみでなく、幼稚園・学校が、異文化から来た子どもたちを快く受けいれるのでなければ、彼らは新しい土地で自らを伸ばしてゆくことはできないだろう。この点で社会と学校とは切り離すことができない。学校が競争原理に立って能力に重点をおくかぎり、異文化からの子どもたちはハンディキャップを負うことになる。異った者同士が互いに理解を深めつつひとつの社会を形成する場所が学校であると考えれば、それはデモクラシーの価値を個人の中に実現する場となるであろう。三十年前に私がこの市にいたころ、アメリカ中西部のこの都市は、黒人、アジア人、インディアンなど異人種のことを考える人間関係委員会を市長の諮問機関として持っており、この点で進歩的な市と考えられていた。私がお世話になった北川台輔先生は、その委員会のチェアマンをしておられたし、T夫人も委員のひとりであった。それから現在までの間に、西欧の各国は、移民や難民を多数引き受けることとなり、世界情勢も加わって、白人社会は、異民族を加えて多様な社会を当然と考えるようになった。学校もまた、その子どもたちの異質性を尊重しつつ、ひとつの社会を形成することを大きな課題とした。日本は単一言語、単一民族の問題はないと考える人もいるが、歴史的にそうであるに違いないけれども、異質な者を選択し排除した上で、同質な者の利益を保護しているのであって、その故に世界の人々の眼からは利己主義と見られるのである。この点で白人社会はこの三十年間の努力の末に、異質なものをそのままに受入れる社会へ

の変貌を遂げたのだと思う。

ミネアポリスの滞在は、四日間という短い期間だったが、一晩、友人のS氏の高校生の子どもの卒業レセプションに連れていってもらった。四人のきょうだいの末子であるこの子どもは、ピアノが好きで、高校の講堂で行われたこのレセプションでも、数人の同級生と共に、ピアノをひきながら歌った。プログラムはすべて卒業する高校生によって運営され、その地域の公立学校の理事である牧師がメッセージを述べて、朗読する者、演奏する者など、静かな夜のひと時であった。卒業生の両親やきょうだいが、ほとんど普段着のままで集まり、体育館に用意されたコーヒーとクッキーで歓談し、先生や若い人たちも交って、笑いさざめく。市の郊外の小さなコミュニティの学校には、学校暴力は縁遠いようであった。

ミネアポリスは、欅の並木の美しい自然の豊かな町であった。しかし、ここにも都市化の波が押寄せていることは明瞭であった。湖と教会の伽藍を中心としたダウンタウンの真上に高速自動車道が走り、そびえ立っていた教会の塔はそのかげにかくれてしまった。商店街は舗石と天蓋でつなげられた。並木道を蔽う欅も、十五年程前に害虫のため多くが枯れ、植樹し直したとのことであった。そういえば、まだ若樹の並木道も各処に見られた。大学のキャンパスも、近代的な建物が著しく増えて、カナダのエドモントンからくると、都会の窮屈なキャンパスのようにみえる。N氏の家は、湖の近くの最も閑静な地域だったが、空港が近くにできて、昼間は飛行機が屋根の上を頻繁にとび、ときに会話を中断せねばならぬくらいである。それにもかかわらず、異質な者を受け入れる理念を貫いて実践に移したこの社会は、精神的に成長しつつあるのではないだろうか。

（愛育養護学校）

SF的読み解き
子どもという風景

第八回 「もしも……」のいろいろ

堀内 守

1 条件法

「もしも……だとしたら」という言い方をいろいろなものごとにあてはめてみる。

もしも空の色が赤かったら、
もしも月給があがったら、
もしも月が鏡であったなら
もしも空を飛べたなら、
もしも雲が白砂糖だったなら、
動物がことばを話せたなら、
もしも太陽がなくなったら、
……

とにかく、何でもこの条件法によって、別の世界へ連れていってもらうことができる。

これをばかばかしいと言って拒否してしまうと、その入り口は閉ざされてしまう。もったいない。

でも、それを拒否する人だって、たったいま挙げたい

くつかの「もしも……」のうちに思い当たるものを発見できるだろう。たとえば、「動物がことばを話せたら」という仮定は、ちょっとひねると、物語の世界になる。モモタロウに向かって、犬は口をきいたはずだ。それを疑いもしないで聞いていたのは幼なかったからという理由に尽きるのだろうか。物語という枠がそうさせたのではなかったろうか。天地草木、ことごとくが語っているような――つまり、それだけ心が躍動していたといえないか。

歌もそうだった。歌詞のなかで、犬も木も花も語っていなかったろうか。歌の『野ばら』のなかの野ばらは少年とみごとに語り合う。しかもかけ合いに近かった。

擬人化である。

いや、詩全体が死せるものを活かす力をもっていた。

万葉の歌人はうたった。「妹がかど見む、なびけこの山」。妻と別れて旅に出た。いよいよその姿が見えなくなる。この峠に立って、この山をなびかせて、わが家の門にたたずむ妻の姿を見たい、というのである。

この「なびけ」という命令形は、まずもって、祈念の激しさをよく示している。

「呪術」だと割り切る人でも、この意味には心うたれるのではあるまいか。

精神と理性

ここで面白いのは、右の一行に出てくる「心」と「割り切る」の対比である。どうやらこれは精神と理性と並行しているようだ。

むずかしく考える必要はない。

「精神」の方は語源的には「理性」よりも生命的である。「スピリット」は、輪郭が広まるばかりだ。

肉体を生かすもの。生気（昔は息がそれであるとされていた）。精神、霊、心。霊魂、亡霊、幽霊。天使、悪魔、百鬼、活動家、活気、元気。気だて、気質。アルコール。

まずはこんなところである。

この広い意味は、「気」の風景をよく示している。む

ずかしく「精神」と力むから、コチコチになり、哲学は頭が痛くなるなんて逃げ腰になる。ホントウは、哲学とはもっとずっとヤワラカなのである。つまり、これらの広がりを味わうのである。そして、この図柄のなかに、古い時代からの観念の生きた姿を感得する。「元気を出せ」とか「頑張れ」などと現代人が景気づけをする。それも、このような古層からのこだまである。悪霊と神霊とアルコールが同居しているのも面白かろう。

「月が鏡であったなら」とか「もしも月給があがったら」は、日本の都市化が進む段階で、サラリーマンが現われたことを示す。映画の主題歌だった。

というわけで、「もしも……だったなら」は、異世界への開口部をなしている。

入口あたりでストップしたのでつまらない。どうせ入り込むのなら大きな世界に入ってみたい。

さて、他方の「理性」の方である。こちらは、語源的には「分ける」こと。「測る」こと。「正気」であること。などである。

酔っているのではなく、醒めていること。こちらは、「味わう」というよりも、「分別する」方だ。だから「分け」「理性」「道理」というように、どこまでも「ワケ」がつきまとうワケだ。

2

アリスの風景

『ふしぎの国のアリス』は、この「もしも」の世界の数学版である。ちゃんと「ワケ」が示されている。この「ワケ」が。教訓的でないのがよろしい。

自由奔放な空想と言語ゲーム。笑いとどんじゃか騒ぎ。想像力のざわめき。

ルイス・キャロル。本名チャールズ・ラトウィッジ・ドジスン。オックスフォード大学の数学と論理学の教授だった。ルイス・キャロルはペンネームである。それは、よく知られていることだが、本名からの変身によるものだった。まず本名のチャールズ・ラトウィッジ(Charles Lutwidge)をラテン語に直して、カロルス・ルドヴィクス(Carolus Ludovicus)とする。これをさら

にひっくりかえす。Ludovicus Carolus を英語に直すと「ルイス・キャロル」となる。

一八六二年のある夏の日のこと、ルイス・キャロルは、クライスト学寮のルデル博士の三人の小さな娘をつれてテムズ川にピクニックに出かけた。そのとき、まんなかの娘のアリス（当時九歳）にせがまれて即興でつくったのがきっかけだった。

「せがまれて」ということばをさらりと通ってはいけない。その辺でじっくりと腰を落ち着かせて、想像力のかぎりを楽しんでみるべきだ。九歳の少女に「ねえ、何かオハナシして」と「せがまれている」数学の先生の顔の表情を想像してみよう。

すぐに「ウン」と言えず、困ったような、扱いかねているような顔つきが浮かぶ。それでも少女はますます「せがむ」。いいかげんなところでやめてしまったなら、おとなは話をそらしてしまう。少女は経験上、それを知っている。姉と妹も応援に加え、「ねえ、オハナシしてよ」の大合唱がはじまる。

これを避けるには、「オハナシ」を即席でつくる以外はない。そこで、観念したドジスン先生は、寄り切られた格好で、「ではオハナシしてやろう」と応ずる。あの合唱はとたんに消え、静かになる。

ドジスンがその場で語ったのは「地下の冒険」という話だった。主人公は、眼前にいる少女たちをモデルにした。即席の話だからすらすらと進んだとは思えない。途中で、聴き手の少女たち三人は、感心もしたろうが、不平を口にしたり、不満そうな顔つきもしたに違いない。話の腰が折れることもあったろう。逆に合の手を入れるかのように、「ウン、ウン、ソレデ」とか「ソレカラ、ドウシタノ」とか「アア、ヤッパリ」とか、口にしたことであろう。

こういうぐあいに想像力を介して『ふしぎの国のアリス』を読んでみると、妙味が一段と光ってくる。

ドリトル先生の旅

ヒュー・ロフティングの『ドリトル先生』の誕生もこ

れと似ている。

第一次大戦にアイルランド軍の将校として出征したロフティングは、戦場でさまざまな場面を目撃した。たとえば、荷物を運ぶ馬は、重いけがをした場合、射殺されてしまう。人間の場合には手厚く看護される。どこかおかしい。こんなことがきっかけになって、馬と語ることができる名医がいたとしたら——という奇想天外なアィディアが生まれた。

しかし、それが形をととのえるには、大事なきっかけが必要だった。それが彼の子どもたちである。一九一七年のこと、彼は戦地で負傷して、アイルランドに送還される。戦争が終わってからは、一九一九年にアメリカに渡る。この間、定期的に自分の子どもたちに「ドリトル先生」を主人公にした話をきかせていたらしい。息子の名もわかっている。コリンという。毎日、夕方の六時になると、コリンは床につく。そのとき、いつも「ドリトル先生」の話をせがむ。

こういうきっかけは、どこの親にも平等に与えられている。いや、そういう平べったい言い方よりも、どこの親も、その子から「オハナシしてよ」と執拗に迫られるチャンスはかならずあると言っておこう。

「ドリトル先生」、つまり Doctor Dolittle はイギリスの田舎に住む獣医である。住所の名前もふるっている。「沼のほとりのバドルビー」。動物語を「先生」に教えてくれたのはオウムの「ポリネシア」だ。百八十二歳とも、百八十三歳ともいわれている。生まれたのはアフリカ。(いや、ホントはロフティングの頭のなか)。いまでは世界中のこどもの頭のなかに住んでいる。

メスのアヒルの「ダブダブ」。「先生」のうちの家政婦役。お金のことに無関心な「先生」の台所のやりくりに苦心をしている。

フクロウの「トートー」。早耳で有名。数学者。まずは「ドリトル一家」の知恵袋というべきだろう。忠実な飼い犬「ジップ」。

このまわりに、くいしん坊のブタ「ガブガブ」とサルの「チーチー」がいる。この二人は道化役である。食物

に対しては多方興味をもち、書物まで書いている「ガブガブ」は、美容体操をしてやせるように努力している。「チーチー」もそうだ。扮装がお手のもの。

頭が二つに、からだは一つという珍獣「オシツオサレツ」。大変なはにかみや。

境界線の喚起力

「アリス」も、「ドリトル先生」も、オトナなのかコドモなのか、よくわからない。双方が入り組んでいる。今様にいえば、〃クロスオーバー〃であろうか。

物語の方は、おもしろがらせるために媚びてはいない。調子を落してはいない。

いかにも「コドモ向け」というようなところはない。「オトナ」の読み物としても上出来のものになっている。つまり、「オトナ」と「コドモ」の境界線はきっちりときまっているのではなく、出入自由、往還自由なのである。その「自由」はどんな形で出ているか。まず、主人公の「ドリトル先生」。

Dolittle→Do little。いわずと知れた「できぬ」。医者ならさしずめ「ヤブ医者」といったところ。だが、この音のほうはどうか。「ドウリトル」→「ドリトル」。なかなかよろしい。そのよろしき音が、あやしき「ヤブ」の意味をもち、しかも、ご当人は愛にあふれたお人よし。このズレが喚起力をもっているのである。

「ドリトル先生」の物語は、舞台をいろいろなところに移す。アフリカ、郵使局、月、湖、サーカス、動物園。そのたびに、ロフティングは自分でさし絵を描いた。シルクハットをかぶり、太り気身のドリトル先生は、眼が小さい。そのふるまいはコドモに近く描かれている。

さて、その「ドリトル先生」は、一九二二年に出版された『ドリトル先生航海記』になると、少し風貌が変わってくる。語り手は、同じ町に住む靴屋の息子トーマス・スタビンズ（トミー）に移るので（しかも、そのトミーがドリトル先生の助手をして、いまは老人になって、少年時代の思い出を語るという構成になっているので）、「ドリトル先生」に対する評価もそれだけ変わったのか

もしれない。

まず、「ドリトル先生」はいつのまにか「博物学者」になっている。何でも知っている人になっている。その最初の出あいも奇妙なものだった。小柄な、太った人とトミーが雨の日にぶつかって尻もちをつく。

トミーは「ドリトル先生」から「スタビンズ君」と呼びかけられてよろこぶ。いつも「坊や」と呼ばれるのをきらっていたからだ。

このところはまことによく書けている。

3

もしも……の世界

「もしも……だったなら」という発想は、論理的にも、修辞的にも、詩的にも有効である。仮説を立てること、想像力を発揮すること、変幻自在に戯れてみること、のように広がっていく。

『ドリトル先生月へ行く』（一九二八年）においては、語り手のトミーはもう立派な助手になっている。月世界で収集したデータをたくさんもっていて、それをどうまとめようかと考慮中である。ところが、語る相手は科学者ならぬ一般読者に向かって月世界のことをどう語ったらよいのか、トミー（いや、いまはトーマス・スタビンズ、医学博士ジョン・ドリトルの秘書である）は、その語り方を身近な〝友〟を稽古にしていろいろためしてみる。下書きの原稿を犬のジップに見せたら、ジップは、月世界にネズミがいたかどうか、そんなことにしか関心を示さない。ガブガブは、月ではどんな野菜を食べていたか、そんなことばかりをきこうとする。

そこでスタビンズは考える——

人間の注意力はバターのようなものだ。あまり薄くひきのばすと広がりすぎて、何にも頭に残らなくなってしまう。月世界では目にも耳にも頭にも、数かぎりない新しいことが押し寄せてくるのだから。

「もしも……の世界」に入るには、隠喩が巧みに使えなくてはならないようだ。それに「ドリトル先生」のように、コドモのようなすなおな心で新しい問題にぶつか

ること。あらかじめこうだときめてかからないこと。

調べまわること

ドリトル先生の秘書トーマス・スタビンズがいうとおり、ドリトル先生は何でも調べあげていく。そのたびに、先生は少しずつ変わっていく。調べては動物語や植物語をよくおぼえていく。だから、「月世界」のレポートも一方的な観察記録ではなく、「月世界」の生き物たちとの会話の結集である。それはインタビューでもあるし、討論でもある。そのような生き生きした会話である。

ドリトル先生の「会話」は、対象に向かい、それを理解しようとしてやわらかになる過程である。スタビンズは、そのかたわらにいて、ドリトル先生の個性が時折消え、先生がまるで植物や動物の代弁者の役割から、それらになり切る寸前にまで進むのに驚かされている。

同じ「会話」でも、この両者は現われ方において大いに異なってくる。「代弁」はあくまでも「翻訳」だから、ある種のもどかしさがつきまとう。だが、相手になりきってしまえば、「代弁」の段階からもう一歩進み、物皆が語る世界がひらけてくる。

それは詩的な世界だ。

ことばがよみがえらせる世界だ。

ダブダブがあずかるドリトル先生一家の「台所」のやりくり。これは、どんな人も日常見慣れている家計の姿を示している。しかし、この、したたかなアヒルが主人公に入りこむことによって、いわゆる「台所」が何という生き生きした姿で見えてくることだろうか。

詩的世界とはこのような世界だ。

「生き生き」そうだ。その表現は、いまでもひんぱんに使われることばの一つだ。

あまりによく使われるものだから、時にはお題目のように見えないでもない。ある大先生（たしか、ノン・リトル先生とかいった）が講演のなかで、あまりに「イキイキとした子ども」を連発したので、聞いている方には大変ズレた形で「キイキイした子ども」とひびいたと

か。とにかく殺し文句なのである。

連発するのはさけ、ついでにお題目のように唱えるのもやめ、実際に生き生きするように、意気と息を合わせてつくり出す生活を考える方が粋である。

境界の往還

境界のなかでは国境のように、ケンノンなものもある。県境になると、川や山という自然指標がシルシになる。列車で走っていくと、途中に「ここより〇〇県」というような表示もある。国境とくらべると、県境はあまり実在的ではない。

町の境、区域、学区……いろんな「境」がある。昼と夜の境もあるし、内と外とのサカイもあり、人と人とのサカイもある。民法の中でいちばん奇態に思えるのがサカイをめぐる規定。まことに、人間はサカイをめぐってトラブルばかりつくり出しているようにも思える。だが、境にはふしぎな喚起力もある。

「カイワイ」「境内（けいだい）」「露地」「この世とあの世」「コドモとオトナ」……これらの「サカイ」はどんなものなのか。スイスイと通れる境もある。悶々として、やっと通る境もある。変身、変態、脱皮を重ねて通る境もある。「行きはよいよい、帰りはこわい」という境もある。

このような「境」を放っておいて「生き生き」だけを唱えるのはもったいない話だ。いや、もったいないではとどまらない。「ノン・リトル先生」たちは、コドモを「コドモ」というがっちりした壁でかこってしまう。「ホンライ子どもは純なのであります」などともおっしゃる。

でも、一次方程式あるいはワン・ショットではうまく解けないのが子どもの世界だ。何しろ、そこでは時とともに風景が変わっていく。どこをもって「ホンライ」と見なしてよいのか。こちらもいっしょに動いていくのだから、こちらの「ホンライ」も変わる。ホンライはホンライ動的なのだ。

そう考えるとき、この風景ははるかに生き生きしてくる。

（名古屋大学）

子どもたちのこと

八、おしゃまなA子とゆっくり型のO男

大橋　利恵子

男と女の性差は生まれつきではないと言われるが、4歳の男と女の子を見ているとそうかな？と思うことがある。何をさせても比較的じょうずにさっとできるのが女の子で、大変手がかかるのが男の子に多いように思うのは私だけだろうか。無論、家庭での育ちの差であることは言うまでもなく、すべての女の子が成長が早いわけではないのだが、4歳児を担任するたびに、自分の身のまわりのことや新しい遊びへの取りくみ方など、どうしても女の子の方が素早く思う。七月ごろになると、いばった口調で「そんなことしたらいけないんです」などと教えたりする子もいる。それに比べ、男の子は自分のやりたい遊びに熱中することがまず第一で、自分の持物を整理することとか、衣服をきちんと着ることとか、のりやはさみをちゃんと使うことなど後まわしのようである。

今年度の4歳児もまた、しっかりした女の子集団と大変手のかかる男の子の集団とができてきた。その中の代表がA子とO男である。A子は入園当初は不安な表情をみせ、いつも教師のそばにいた。教師が職員室に連絡等で行く時にもちゃんとくっついてきて、待っていた。そのうち、教師と一緒にやり始めた活動に一人で残っているようになり、やがて、朝から遊びを見つけられるようになり、教師のそばから離れていった。と思ったらすぐに、園内どこへでもおもしろそうなことをさがし、みつけてくるようになり、友だちともじょうずに遊ぶように

なった。何か作る時でも、粘土・フィンガーペイント等、新しい遊びの時でも一番にやり、しっかりやり方を理解してできる。給食当番でも、いつも配膳がたりているかを見てまわることや、机上にごみ箱を置くのは教師の役目になっているのだが、A子はそれを見ていて、自分が当番の時はさっさとそれらの仕事をすませてくれる。友だちから「A子先生だ」と言われてにこにこしている。ルール違反をみつけると告げ口がさかんな今日このごろなのに、A子だと告げ口する前に自分で「そんなことをしたらいけないの」と注意している。入園当初のことを思うとまったく信じられない思いなのである。

それだけしっかりしているからいばっていて少々にくらしいかと言うと、決してそんなことはなく遊び方は実にまだかわいい。七月の七夕飾りの時にも、ちょうちんの作り方を覚えると、すぐにその作ったちょうちんをぶらさげて、となりのクラスや園長先生に見せに行っていた。そして園長先生に作ってあげるのだといっては、広告紙で作ったり、大きなちょうちんを作ったり、白い紙で作ったり、くりかえし四つ五つは作っていた。その大きなちょうちんを毎日ぶらさげては廊下を行ったり来たり、何が楽しいのか三日間はちょうちんばかりで遊んでいた。

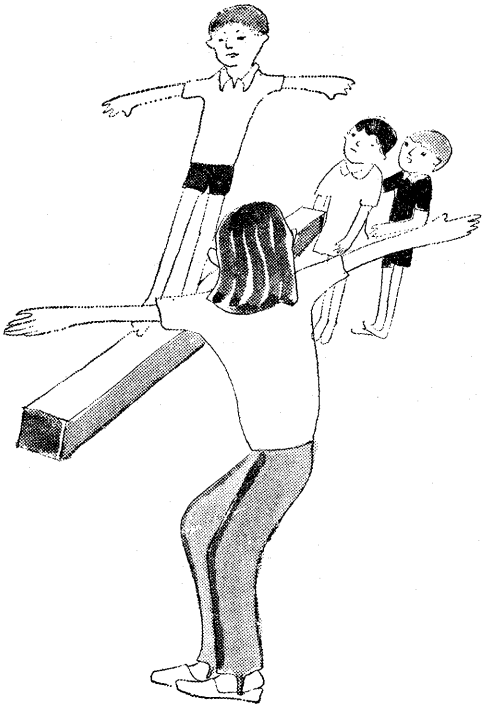
こんなA子に対照的なのがO男である。自分自身のまわりのことが、ほとんど自分でできず、それでも入園当初はみんながそんなものだからたいして目立たずにすんでいたのだけれど、一ヵ月もたつとみんながじょうずになったり、しっかりしてきて、何とO男だけ。気がついたら、全然じょうずになっていない。家でも自分のことは自分でやるようにしてくださいと家庭連絡をしても、なかなかうまくできなくて…と返ってきてしまい、これは、のん気に根気にやるしかないと、くつのこと、制服のこと、かばんのこと、お手紙のこと、一つ一つ「O君」と声をかけてきた。

遊びはというと、いつもブロックにまず参加、しばらくすると、それをかたづけずに放り出して砂場へ、そしてくつもズボンもぬれてもかまわず水を使って遊んでい

る。もうかたづけましょうと言ってもなかなかやめれない。それだけ熱中しているのだと理解しなくてはならないのだけれど、毎日となるとかんにん袋の何とやら…。つい声を荒だててから我が身を反省！

同じクラスの一員で、同じようにかわいい我が子なのだけれども、私とA子、私とO男の関係はあきらかにA子に対する方が、ほめる言葉も多くにこにこしていると思うわけである。人はそれをえこひいきと言うかもしれない。でも教師も人間、わざとやっているのではなくて感情が出てしまうことだってあると、私は言いたい。そしてもし、O男が何でも自分できちんとできて、遊び方もじょうずになってきたら、どんなにかにこにこしてほめてあげれるのに……と心の中でつぶやいている。

（岐阜北幼稚園）



メアリ・フランセス・デュランテーニ著
「17世紀オランダ絵画における子供」

アン・アーバー・1983
UM リサーチ出版

堤　委子

読み終ってさわやかな本である。一冊の本を価値あるものにするその魅力は種々あるだろうが、本書の場合、問題にとりくんだ著者の姿勢がそうさせている。

著者は、「十七世紀オランダ絵画における子供」という問題を思い入れぬきに、距離を置きつつ丁寧に誠実に解き明かしていく。個々の解釈については、その妥当性に疑問も残ろうが、美術史研究がある問題に関する著者の見解表明と考えれば、われわれはまず耳を傾ける必要があるだろう。

本書はまた子供の登場する絵画にしぼることで、とかくレンブラントのみによって代表されがちな十七世紀オランダ絵画のもう一つの側面を紹介することにもなっている。聖書や神話の物語が絵画化される一方で、当時の人々の日常生活が次々と画面にのせられていったのである。ここでは「家庭内の諸相」「子供と学校教育」「遊ぶ子供」という章だてで、百六十点以上の図版が挙げられているが、その中に泣いたり笑ったり、今も変わらぬ子供たちの姿を眺めるだけでも楽しい。ただそういった一

見何でもない描写の中に、寓意や教訓、諺が意識的にもりこまれていることが解き明かされていくのである。その意味では、大方の場合、子供たちは主役というよりも、絵の主題を語るための一モチーフに過ぎないのだが、家で子を叱る場面はあっても叩く場面はなく、悪さをする子供たちの傍には、必ずその原因となった大人たちの愚行が描かれ、なお子供たちへ寄せる当時の人々の気持ちが感じられてほほえましい。

さて、本書は英文で翻訳もまだ出されていないようであるから、個々の内容についても簡単に紹介するのが適切かと思われる。

まず絵を見てみよう。一組の母子と若い女が描かれている。（図1）母親は乳をやろうとしているが、子の注意は頭上のがらがらに向けられている。乳を飲むことは体のみならず心の成長にとっても欠かせなかった。母の乳を通じて道徳をも吸い込むと考えられていたからである。一方がらがらは、当時の寓意書中で、世俗的喜びの象徴として扱われていた。したがってこの絵は単なる情景描写ではない。すなわち、この子供は乳を吸わずおもちゃに心引かれ、徳ではなく享楽への道を選んでいるのである。

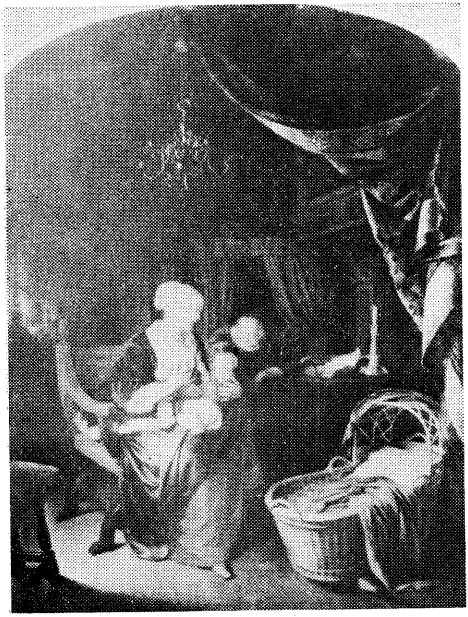


図1・ダウ「若い母親」
ベルリン国立絵画館

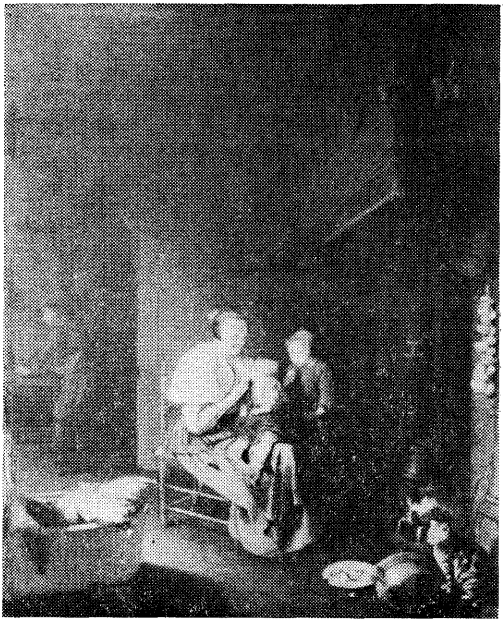


図2・ダウ「大工の家族」
バッキンガム宮殿

もう一枚似た絵をあげよう。（図2）画面中央に母子、傍に少女が立っている。今度は赤ん坊は、乳を一心に飲んでいる。つかの間の喜びにまどわされず、正しい道を選んだのである。左奥に見える隣の部屋では、父親が大工仕事に励んでいる。大工の父親と言えば聖家族が連想されるが、ここではむしろ諺、「大工が器用なほど木端も多い」（子は親に似るもの）に関係しているらしい。手前では猫が傾いた壺や皿を前におとなしくしている。親を中心によく治められた平和な家庭が描かれている。

しばらくすると離乳食に切り換わる。母は匙を差し出

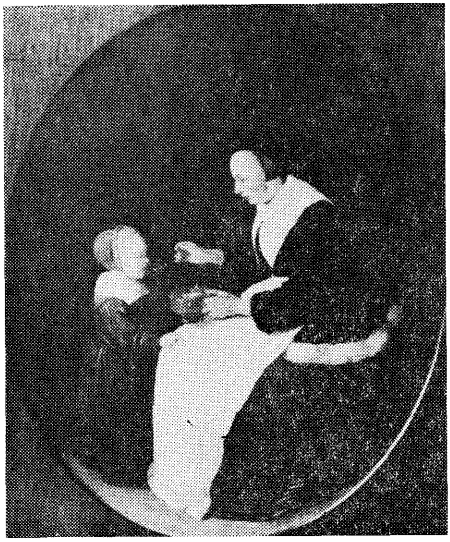


図3・ブレケランカム「母と子」
アムステルダム国立美術館

し、子は口を開け待っている。（図3）は子供が嫌がって泣いたり顔をそむけたりしている例も見られる。これらはいずれも「粥を差し出されたら口を大きく開けよ、さもないと後で何ももらえない」という諺によっている。つまり、粥も有難く受ければ、後でもっとよい御馳走が与えられよう、という訳である。当時のクラメリの寓意書では、神の恩寵もこの諺のとおりと記述され、子の食べる粥のおこぼれを喜ぶ犬たちの絵がつけられている。（図4）

図4・「与えられたものを喜んで受けよ」
ダニーソス・クラメリ
オクトギンタ・新道徳寓意図像集」
フランクフルト，1630.

いよいよ子供たちは食卓につく。絵では食前の祈りが

図5・ダウ「窓辺の女中」
ロッテルダム・ボイアンス・ブニンゲン美術館

テーマとなる。「窓辺の女中」（図5）では、水差しを空ける女が大きく描かれ、左手奥に母と子がいる。母はパンをナイフで切り分け、少年は両手を合わせている。この手前の女は、壺がどんな液体でも最初に注がれたものを容れるように、子供も最初の影響が決定的である、という寓意書の文と絵とを受けている。また左手前の実のなる植木が子の前途を示している。

祈りの情景が大きく描かれたものも多い。（図6）母の給仕を少女が小さな手を合わせて待っている。が、祈りは形だけで、心は目の前の皿に配られる食物にのみ向いている。後の兄も祈るというよりは、単に準備を待っているという風情である。親たちも一時、手を休めることさえしない。床は散らかり、飼犬が鍋の縁を嘗めている。

図6・ステーン
「食事時の農民一家」
ロンドン・ナショナル・ギャラリー

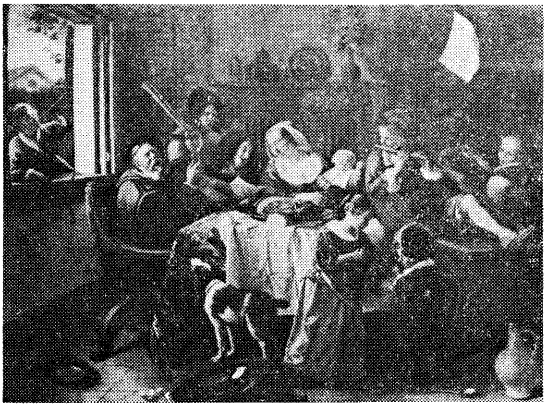


図7・ステーン
「愉快な仲間」
（老人が歌えば若者が笛吹く）
アムステルダム国立美術館

御馳走の場面も描かれる。大人たちの飲めや歌えの騒ぎに混じって、子供も煙草を吸ったり、器からラッパ飲みしたりしている。（図7）これは「老人が歌えば、若者が笛吹く」（子は親を真似るもの）という諺の絵画化である。この場面に「めちゃくちゃな家族」と題される作品が続く。（図8）酔い潰れる女のポケットを子供たちが探っている。起きている男女は、自分たちに夢中で注意すらしない。例によって犬が皿から食べている。食卓に乗り食べる犬や、鳥籠に手を出す猫が描かれることもある。

図8・スーン
「めちゃくちゃな家庭」
ロンドン・ヴィクトリア・アルバート美術館

これらは何のための集まりか確定できないが、ある特定の祝祭を描いたものに、「十二夜」、「聖ニコラス祭」などがあるステーンの描く「十二夜」を見てみよう。（図9、次ページ）前景で、おもちゃを一杯持った少女が、右手の女の招きに応ぜず逃げるような素振りを見せている。左では少年が泣いているが、昨年一年の行ないがよくなかったので、何ももらえなかったのである。少女は良い子だったのだろう。この兄妹に下された判断が妥当かどうか、われわれには知る術もない。が沢山のおもちゃをもらってなお見せるのさえ嫌がる少女は、少し甘やかされているようで、この絵も兄弟姉妹を分け隔てしないようにという当時の警告を思い出させるという。

以上数点に絞って紹介したが、本書では多くの作例が当時の寓意書他、書物や演劇の中の子供観、教育観を引

きつつ読み解かれていく。明かされる意味は、時に意外で、非常に興味深い。が、これらの光景はどれも日常生活を題材として、身近で親しみやすいものである。しかし、考えてみれば、今のわれわれはこれらの暮しから何と隔ってしまったことだろう。授乳も祈りもままならない。全員が揃って朝夕の食事ができる家庭がどれくらいあるだろうか。むしろ「老人が歌えば若者が笛吹く」の場面に近い毎日を送っているのかもしれない。こう思えば、本書で論じられた平和な情景そのものが、今のわれわれにとっての警告となっているような気がしてならないのである。

（人間文化研究科）

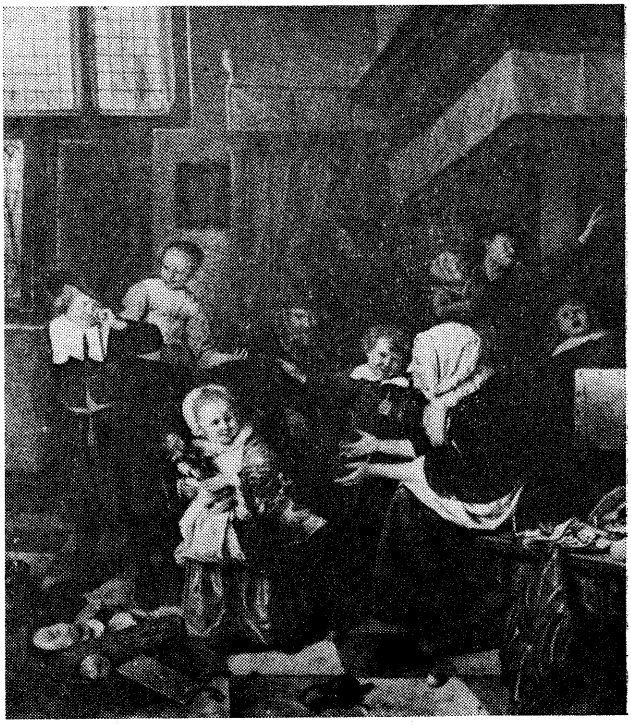


図9・ステーン
聖ニコラス祭
アムステルダム国立美術館

私の造形教育

福田　理恵

『幼児の教育』のカットを描き始めてから五年が過ぎ、六年目を迎えようとしています。自分ではいろいろ挑戦して多くの題材を選んできたつもりですが、パラパラとバックナンバーをめくってみると同じパターンの繰り返しに思えてなりません。しかし今年の四月号より、長年に渡って「幼児の教育」を盛り上げて下さってきた皆川美恵子さんの編集から小沢誉子さんにバトンタッチされ、編集・構成にも十分個性が滲み出るのでしょう。私のカットもいささか変化したかの様に見えるから不思議です。

私はこの誌とのつき合いから本田和子先生とお知り合いになりました。その御蔭でお茶の水女子大学・家政学部児童学科で「児童造形」の講座を担当することになりました。今年で三年目に入っております。以前は十文字女子大教授の幼児教育ではベテラン中のベテラン林健造先生が長年指導に当ってこられた講座です。先生の熱烈なファンも多いとうかがっております。経験不足の私ですが、お引き受けしたからには努力して私なりに特長あ

る造形教育を行ないたいと思っています。そこで今回は私の造形教育の考え方を皆様にお話しすることにいたします。

造形活動は内面的高まりをもって臨むとき、活動の成果は大きく意味深いものです。幼児の場合、この内面の高まりを出会うさまざまな事柄から引き起します。又造形活動を行うことによって彼らが人に伝えようとするコトバ、以上のことを補う役目も果します。したがって幼児を囲む大人たちは造形活動により明確に内面の高まりを知ることが出来、彼らにとっても活動が多大な満足を得ることにつながるのです。しかしながら幼児時代を過ぎ、論理的な考え方、伝え方を身に付けるに従い、自分の中にはもっと複雑で混沌とした奥深さがあり、もしくはありたいと思います。そんな時造形活動は、内面的高揚を得られずに始まり、表現を形式や技法として誤解し、外に見せることのみを意識してしまいます。結果はあやふやの内に終り、残るのは不満ばかりということになります。よって造形活動から遠ざかりたいと思うようになるのです。表現とは「心の中に思う事などを表わして見せること」なのであり、成人に近くなければなる程この表現の源である内面の高揚を自己の中で得る為には長いプロセスを必要とするのです。ところが作り手側から受け手に回った時、造形材料の手軽さ気軽さから往々にしてその内面の高揚までのプロセスを軽んじて見る傾向であります。

ですからせめて幼児教育に携ろうとする人々には造形活動を行うこと＝自己表現の場として短絡視せず、とりあえず、造形的表示がしっかりと出来るようになってほしいと目標を立てました。表示とは「内のものを外へはっきりと表わすこと」ですから、コトバで日常伝えている事柄を造形の目を通して考えてもらえたらということです。幼児の場合、環境さえ身のまわりに準備されていれば、自然に表現が生まれます。幼児の活動と準備するのみの教育者であることに甘んじないで、造形活動を愛する人にまずなってもらいたいと望みました。

一年間の児童造形での具体的方法は、

①造形要素を含む小さな作業を繰返し何度となく行うことにより十分に達成感を味わうこと。繰返し行うことで作業を合理的に進める方法を身に付け、用具の安全な取り扱いを知ってもらう。

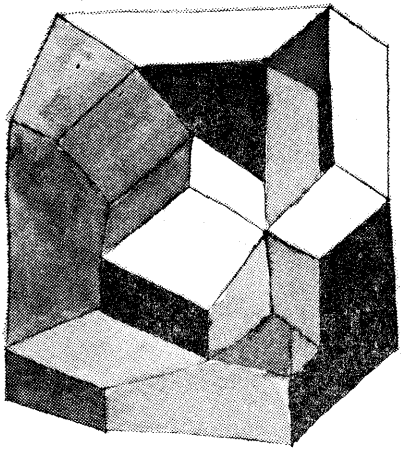
②次に①より少し展開を求めて、方向性や意味を含む表示への練習を行います。ここでは特に映像的な表し方を行い、日常的題材を用いて繰返します。仲間で気軽に見せ合え、自信を持ってプレイできる習慣をもつことで、ことによって堅苦しく考えがちな練習に緊張感をプラスしました。

③そして最後に筆立てのある連続的な表し方ということで、絵本を作ることを行い、完成したものを仲間で読み合い感想を書くところで締めくくります。

年間を通じ造形活動を身近で楽しく、また人に伝える為にはさまざまな角度から物を捕えなければならない難しさも感じ表すことを恐れなくなれば、目標に達成したといえましょう。もしも更に造形活動を通して表現を試みようとする人が現れるようになれば、私も幸いです。

これからも『幼児の教育』にカットを描き続けるつもりでおりますが、時々カットに登場する子供や大人が私に語りかけます。「自由に動き話しのできる絵本に私たちも登場させてもらいたい」と、私も何とか努力して彼らの意に添うような絵本を実現させたいと思っています。その時には是非読者の皆様方にも見ていただき、御意見を拝聴したく存じます。

（お茶の水女子大学講師）



私の見たインドネシアの幼稚園と子どもたち

（後編）

近藤　伊津子

絵本と紙芝居を教室に持って行き、園児の前で本を読み、紙芝居をした。日本で本を選ぶ時、規準にしたのは（この園には四冊贈ったが、別の小学校など合わせて20冊）日本人の作者のものであること、くっきりした絵であること（この国に詳しい数人の忠告、しかし、これは必ずしも当っていないと思った。松谷の『もうねんね』で後述する）、私のインドネシア語の力で翻訳できる簡単明瞭な文章であること、イスラム教のタブーに触れないこと、そして、私の娘が好きだった本の中から。

四冊の本と紙芝居一組、いずれにも、黒のマジックインクでインドネシア語に翻訳して書いた。幼児語が非常にむずかしく、留学生の櫛田武弘氏と、バンドン市民で、幼稚園教師の経験のあるムルヤルト・ふみ子氏の協力なしでは到底出来なかった。

順次、本を読んでの子どもたちの反応を記してみよう。

絵本

『もうねんね』松谷みよ子あかちゃんの本

瀬川康男え、童心社

1ページ　Mengantuk ya

Selamat tidur Guk

2ページ Anjing juga bobok

Bobok senliri

3ページ Mengantuk ya

Selamat tidur Meong

4ページ Kucing juga bobok

Bobok dengan

Menggehungken badan

5ページ Selamat tidur

ku, ku!!

Selamat tidur

pi pi!!

Mengantuk ya.

6ページ Ibu juga bobok

Anaknya juga bobok

tutup mata ya

Ku ku ku bobok

7ページ Sudah waktunya bobok

Sl. Mono juga bobok

Matanya mengantuk

8ページ Selimut juga bobok

Siboneka juga bobok

9ページ Sama-Sama bobok yuk

Bobok yuk tutup mata ya

10ページ Semua bobok yuk

Selamat tidur

この本は絵が地味で、友人の忠告に依れば、この国の子どもたちには好かれないのではないかと思った。しかし、娘がくり返し愛読したこと、文庫で大勢の幼い子どもたちが楽しんだという実績で決めたが、結果的には、ここの園児たちも非常によく見て、聴いてくれた。そして反応は、日本の、文庫の子どもたちと同じであった。訳が悪い（？）上に、読み方もとても発音が下手だったろうに、よく聴いてくれた。犬も猫も、ひよこももちゃんも……みんなねむい、もうねんね、どの子もそうい

う顔になった。

『みんなでね』まついのりこ　偕成社

Semua Bangun
Semua sudah makan!
Semua ber-jalan jalan!
Semua main ayunan
Semua main meluncur
Semua main sembunyi
Buang air kecil
Semua berjemur
Semua menangis
Semua naik mobil
Semua mandi
Semua tidur

これは赤ちゃん絵本の三冊のうちの一冊である。小さな本に、小さな絵、それ故に子どもの心を引きつける。二度目に読んだ時は、手を合わせてねむっているところから始まり、ずっと仕草をつけてくれた。みんなで起きて、ごはんを食べて、散歩して……と、そして最後におねんねで、手を合せて頭の下に入れてくれた。本と一体化して遊んだ。

『じゃあじゃあ』まついのりこ　偕成社

これも赤ちゃん絵本。この本は大さわぎとなった。自動車で男児はうなり声を挙げて走りはじめ、犬になって吠え、猫の鳴き声、赤ん坊の泣き声（日本とかなり違うのである）水道の蛇口から水はテステスとしたたり、（〝じゃあじゃあ〟でないのである）、汽車の踏切りでは、特急が走り抜け、テンテンテンと警笛は限りなく鳴る。トランペットはなりひびく。机の上に乗ったにわとりはククルールーと鳴く。乗りにのって、楽しんだ。やっと静かになった時に、日本の犬、猫、にわとりの鳴き声、赤ん坊の泣き声などをしてみせた。そして、さっそくに真似して、また大さわぎ。こんな小さな本でこんなに楽

しむことのできることは、もしかしたら日本の子どもたちには失われたものかもしれないと思った。

Mobil RR……RR……RR……

Anjing guh guh guh

Air tes tes tes

Kertas bret bret bret

Penyedot Abu nying nying nying

Ayan kukuruyuh

Palang Kereta api teng teng teng

Bayi oee oee oee

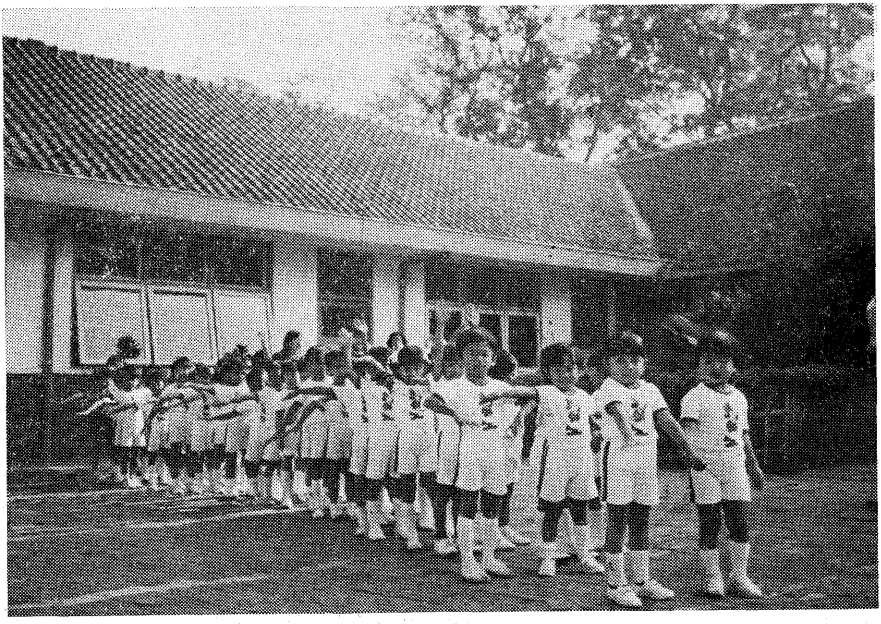
Kapal terbang ngeng ngeng

Kucing meong meong meong

Terompet tet tet tet

『〝ばいばい〟まついのりこ　偕成社

赤ちゃん絵本。簡単な挨拶のくり返し、〝こんにちは〟と言って〝ばいばい〟する。この本は同じく赤ちゃんの



絵本の「あめふり」とあわせて娘がよだれをぬりつけ、あげくにしゃぶって愛玩したものであった。

ページをめくりながら Selamat siang と言うと、そこにひよこを見つけて大きな声で、anak ayan! と言う。次ページで、〃ばいばい〃 Da Da! と言うと、一斉に手を振って Da Da と言う。次の象が〃こんにちは〃と出て来た時は歓声を挙げて〃ガジャ！〃みんなたちまち〃ぞうさん〃になってしまった。のっそ・のっそと歩いたり、耳をパタパタするもの。そしてみんなで〃ぞうさん〃の歌をうたった。その次の兎でも一斉に兎の群舞。耳に手を当て歌を歌いながらおどった。きりんでは真似をしてくれなかったが、歩きまわって歌をうたった。おしまいの蛙は大変である。鳴き声ととびはねることに熱狂し、私はなかなかダダと言えなかった。〃おしまい、またね〃 Sampai sekian ini, Sampai jempa lagi. で、やっと落着いてくれた。

これら四冊の本で後の二冊はこのように子どもたちを夢中にさせるとは予想もしなかった。この国の子どもの

本の事情は良くない。したがって、あまり絵本に触れないですごして来た子どもたちだろうと思われる。中級階層の家庭には本が入らないそのままで、テレビが居間に据えられている。日本のように長時間の放映でないので未だ救われるが、こんなに感性の豊かな子どもたちがどうなっていくのか…今から既に惜しまれてならない。一冊の本にこのように積極的に同化し、体験を存分に発揮するエネルギーには圧倒されてしまった。

文庫（十三年間）では一度も、このような子どもたちの反応を見たことがない。

いくらか、民族の違いから来るものがあるやもしれない。この国の人々は歌・踊りが、自然に巧みで、しかも日常性がある……しかし思えば、日本もかつては、そういう民族でなかったのか。そして子どもたちを比較して見るとき顕著に失われたものが浮力して来るではないか。やがて失われようとしていること、既に失ったこと、流れの中で哀しんでばかりおれないが、私にとっては、個人的には、忘れ得ぬ感動の在園であった。

紙芝居

『るるのおうち』まついのりこ　童心社

かさが風にとばされ、自分の家を探し、見つける、という単純な筋のものである。

子どもたちは前記の本に対するような反応はなかった。一度しかやれなかったということや、私自身、紙芝居についてはあまり見識なく、積極的でなかったこと、つまり経験と力不足がたちまち顕れたのだろう。

二度・三度とくり返してみたかったと今は思う。

絵本は本の中に見るものを引き込む、それに対して、紙芝居は見るものの前に、とび出して来るといわれる。とび出すまもなかったのでないだろうか。子どもたちと、作者に申しわけないことであったと思う。

別れの日、既にめったに被らなくなっていた白い帽子を被って登園した。（この国では田畑に出ている百姓と

か、ベチャ（自転車の人力車のようなもの）引きの車夫、それに日本人ぐらいである、帽子を被るのは。）

園長先生は、さっそく帽子をご自分の頭にのせてみせて、子どもたちと踊りながら、歌を唱ってくれた。

トピーサヤ　ブンダール
ブンタール　トピサヤ
カロウティダ　ブンダール
ブカン　トピーサヤー

（私の帽子は丸い、まるいは私の帽子、まるくないのは、私の帽子でない）

この日、本、紙芝居の他に、手製の軍手指人形（猿と猫二本ずつ）、男女児各一人分の（手縫いの）ゆかたと三尺おび、下駄を贈った。さっそくにそれを着てみてくれたが、浴衣姿で見ると、日本の子らとほとんど違わない。それ故、一層いとしい子ら。

園長先生は絵本でも遊具でも、古いもので可いから送って欲しいといった。（その後、まだその約束を果さないでいるが。）

絵本は乏しい。そして一般の家庭の子どもたちが気軽に手にとって楽しむという状況ではないことも知った。

ひとりひとり　Sampai jempa lagi!（サイバイ　ジェンパ　ラギ）"またあおうね"

と、この園を又、訪れることを約束して別れた。

（かっこう文庫主宰）

保育の中の小さなこと
大切なこと

守永　英子

四月に入園してからひと月近く過ぎたこのごろ、子どもたちの様子に、変化が見え始めた。三歳から入園して一年間、幼稚園生活を経験してきた二十名の子どもに、十三名の新入児が混ざった四歳児のクラスである。

初めは、大人の助けもあまり必要とせずに、自分たちで遊べるかのように見えた新入児たちであった。三歳から在園している子といっしょに、ぶらんこに砂場にと楽しんでいたH子。室内で、線路をつないで、汽車ごっこを充分楽しんでから、庭に出て行く新入の男児三人。A子も、去年からいるT子と、花摘みで忙しくとびまわっていて、保育室近くで、ぽつんとひとりでいる姿を見かけることは、あまりなかった。庭に出て、そばにくる子どもたちと、遊び始めようとするとき、並んでいる顔が、一年間私が付き合ってきた子どもたちばかりなのに、驚いたり、苦笑したりということもあった。

ところが最近になって、三歳から来ている子どもたちが、自分たちの遊びを始められるようになってくると、新入の子どもたちの気になる姿が見え始めた。いつも線路をつないで仲良く遊んでいた三人の男児が、線路を離れてふざけ合い、それでも高じてくるとき、他の二人の楽しそうな様子に比べ、きまってT夫の表情が、楽しさばかりではないものに変ってくることが気になってきた。

A子も、今日は、あまり人のいない砂場にぽつんと、ひとりでしゃがみこんで、小さな器に砂を詰めている。淋しそうに見えるA子の姿が気にかかって、私も砂場にはいった。A子は、私に関心を向けず、面白そうな様子もなく、前の動作を続けている。〃働きかけようか、どうしようか〃と迷いながら、「A子ちゃんは何をしてるんでしょうね？」と、問うような、つぶやくような言葉をかけてみる。A子は、黙ったまま、今度はバケツに水を入れて、深くもないくぼみのあたりにあける。

〃いっしょに、いてあげたい〃〃でも、どうやって？〃あせりの中で、いろいろなことが頭の中をかけめぐる。〃A子と同じように、器に砂を詰めることをしようか〃それとも、〃そばに大きな山をつくってみようか〃〃ほかに何か、A子とつながるような動き方はないか〃私が、迷いながらシャベルで砂を掘り返している間に、A子は、くぼみに水をあけることを繰り返し、その水があふれて流れ出した。

〃そうだ、流れ出した水を受けとめよう〃

私の迷いは、そこで、一挙に手がかりをとらえ、あふれた水を受け集めるように、一本の溝をつけた。A子の水が、流れる方向を見つけたかのように、集まり、私の溝を流れ出した。私は、A子のくぼみから直接に溝をつけはしなかった。そのくぼみからあふれ、とりとめもなく広がって、しみ込み、流れる水を、少し離れたところで溝に集めたのである。

A子と出会ってまだ一月足らず、触れ合いも少なく、A子の世界は、私にとっては、まだ未知のものである。淋し気に見えるA子の様子は、私から見えたもので、その世界の中で、実際A子が何を感じているのか、私にはしかとはつかめない。私の働きかけにあまり反応を見せなかったのは、A子に私を受け入れる用意がないことではないか。と、すると、A子のくぼみに直接溝をつけて水を流すことは、A子の世界を侵すことであり、A子の水を奪い去ることである。そのような思いが、私を遠慮がちにした。

少し離れたところで、溝に流れ込む水に、A子は、ち

らと目をやった。「あ、流れてきた。川みたい！」私は、水が、A子とのつながりを作ってくれたことをうれしく思い、声に出した。A子は黙っていたが、今度は、流れ込む先を意識してか、せっせと水を流しはじめた。流しては川の方を見る。どうやら、細々ながら、つながったようである。

砂場の外で眺めていたK子が、初めは、「先生ったら、ひとりでお砂場してるの？」とおかしそうであったが、川が長く円周を作り、掘られた砂が真中に積み上げられてきた頃には、自分もシャベルを持って、川の続きを掘り始めていた。黙々と続けられる活動に誘われたかのように、砂場の人数が増え、「入れて」という改まったあいさつもかわされることなく、一つの活動に何人もが加わって、展開していった。

砂場の端で、遠慮がちに砂にさわっているM夫の方にも、川の流れを向けて行き、M夫の表情のほぐれるのを見届けてから、私は、しばらく離れていた保育室の様子をのぞきに行った。そして、その次の瞬間には、顔をつかみ合って叫んでいる二人の男の子の方へ、とんで行かなければならなかった。

そのあと、砂場の活動がどのように展開したか、見届けることはできなかった。いつも残念に思うのだが、保育者は、仕向けた結果を見届けることが、なかなかできない。一人が三十人以上の子どもを預かり、その一人ひとりを充分に活動させたいと思うとき、軌道にのったその場を離れて、他の子どものところへ行かなければならないのである。保育者として、自分の働きかけた結果をじっくり見届けたいと願うのは、ぜいたくな事なのだろうか。

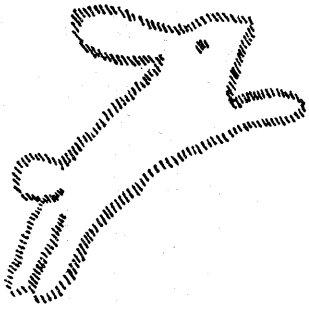
しばらくして、部屋の中で忙しく動いている私のそばのいすに、A子は黙って腰かけた。「よく遊んだわね。エプロンが汚れたからとりましょうね。」という私に、A子は黙って、うなずいた。A子から私への、かすかな接近であった。

（お茶の水女子大学付属幼稚園）

兎園随筆⑭

『実習生』

蕪木　寿江



教育実習生のしおり

「保育とは、心を育てることである。心は心でしか育たない」の実践（真理）に基づき子どもから学ぶ姿勢で、実習されることを希望します。

実習時間　八時より四時三十分迄

保育日誌　記入方法は各校指定のもの、或いは各自のもので支障ありません。翌朝園長に提出のこと。

服　装　軽快、清潔なもの。

髪　型　子ども達と一緒に遊べるように、保育時間中は一つにまとめること。

弁　当　子ども達と一緒に食べることも配慮し、栄養も考え、なるべく自分でつめること。

その他

○『倉橋惣三選集』第四巻一六五頁の、「気がつく」「手が届く」「行き渡る」を読んで、感銘したこと、

共感したこと、などを（まる写しでも可）保育日誌の一頁に記入しておきましょう。

○ 疑問の点は積極的に質問し、僅かな実習期間がより充実した日々になるように心掛けましょう。

○ 早寝を励行し、欠席のないように健康管理に留意しましょう。

○ 子どもの名前を覚える為に、一週間前にお渡しした園児カードは、実習の終った日に園長にお返し下さい。

○ 「実習生」と言っても、子ども達にとっては師と仰ぐ「先生」ですので、言葉づかい、動作など考慮しましょう。

○ 一人一人大切な子ども達をお預りしていますので、右のことをお守り下さい。

「日本の人口は何億人とか言われていますが、その多くの方達の中で、あなた方と出合ったということは、何かの縁があってのことなのでしょう。僅か三週間といっても、その出合いを大切にしたいと思います。三週間が一年に勝る程有意義な日々でありますように——」と挨拶をして、手作りの昼食で、実習生を迎える。歓迎会ではないが、出合いに寄せる思いが人懐っこくいつも同じ言葉を繰り返す。受け入れ側としては責任を全うしたいし、不思議な出合いも全うしたい。申しわけないが終るとほっとして疲れがでる。同じ幼児教育に携わっている者としては、無下におことわりするわけにもゆかず、現に、その学校の先輩諸姉のおかげで、今日の幼稚園があることを思うとお役に立ちたいと思う。

しかし、幼稚園の先生になる為に実習にくる人、単位の為に実習にくる人と、残念ながら前者が四、後者が六の割合である。「お姉さんが美容院を経営しているので、そこの手伝いをします」と、人の気も知らないで堂々と言う人もいる。実習中に、「会社の面接テストなので、」と言って欠席する人もいる。「落ちついて頑張ってきなさい」と言うが……。何はともあれ、この期間は、幼稚園の先生になると思ってやって下さい。どこへ勤めても

同じ基礎的なことですからと、気を静めて話す。

「子どもの減少で募集が少く、先生になりたくてもなれないのです。一年待つ覚悟でいたらなれるのでしょうか——。今は迷っている最中です。この実習ではっきり決めたいと思います。」……「幼稚園の先生は小さい時からの夢でしたが……、ピアノの上手な人から採用されるみたいだから、やっぱり無理なんです。」「昔は貸しピアノというのがあって、二時間六十円だったわ、三台あっても音は聞こえないけれど、脱いである靴でお互いに気配を感ずるわけ、二時間弾かないと損する気がしてね、あっという間に時間が経ってしまうの。」「ピアノは一応あります」「それじゃあ、弾けないのではなくて、弾かないのでしょ」と言うと「そうだ」と笑ってうなづく。それではピアノ以前の問題ではないかと思う。「その人がピアノを弾く時間をつくるか、つくらないか」「根性があるか、ないか」にほかならない。「毎日、二時間でも弾いていたら、こんどはピアノの方からあなたを離さないわよ。但し毎日弾くのね。ピアノが話しかけてくるまで——。」私はこの人の夢を実現してあげたくて夢中になって話す。「各部屋にピアノが一台ずつある幼稚園は日本だけだ。外国では、子どもが歌っているところへ、ギターなり、アコーディオンを持って子どもに合わせる。ピアノはかついで歩けないし、日本はおかしな現象だ」ということも聞き納得するし、第一自主充実保育の場ではあまり弾くこともないが、そう言ってしまったらおしまいなので、モゾモゾしていると、「時間がないのです」と言う。「時間は天から降ってくるものではなく、自分で作りだすもの。」とは言ったものの、現代の学生は忙しいらしい。私はあきらめないで言葉を続ける。「臨界期というのは、乳幼児期だけでなくあなたがたにも言えることよ。這いずることをしないで、歩行器に入って歩くことを覚えた子どもは腕の力が弱いとか、骨が弱いとか言われているでしょ、だからと言ってお母さんのおなかの中に戻すわけにもいかないでしょう。今しなければならないことを今すること、この時期に大切な必要なことをこの時期にすることよ。」神妙な表情に

なったので、「人間だから融通はきくけどね、そのあとの本人の発達次第で心配はないけれど――」とつけ加える。

津守先生がある講習会で、「教育とは励ますことだ。」とおっしゃった。五十点満点で十一点とったらいいと言われたことを思いだすからである。只管、よいところを認め誉めることにせいをだす。どんな小さいことでも…例えば、自分から花瓶の水を取りかえていたら、「ありがとう。」と言う。投げかけてくれた疑問には、すぐ結論をださず一緒に考えて次の質問が生れるようにする。

「どうしても幼稚園の先生になりたい。もう悩まずに決めました。」と、別れの会の昼食をとりながら話す。幾筋もの涙に乾杯！　出会いがあったから、別れが悲しいのだ。「この実習を通して得たことをまた、次の勉強に役立てて、残る学生時代を有意義に過ごしてほしい。」と見送るそれぞれの担任の許しを得て、クラスの子どもの一人、一人に小さなカードを書いて渡していた。女の子には赤いリボン。男の子には緑色のリボンがついていた。

（市ケ尾幼稚園）

ふたりでるすばん

矢崎　淳子

ねえさんと、いもうとがいます。いもうとは、まだちっちゃくて、ねえさんのいうことが、あまりよくわかりません。「だめよ。それにさわっちゃ」と、ねえさんは、はじめはやさしく、いってきかせるのですが、いもうとは、きいているのか、いないのか、わかっているのか、いないのか、ほら、こうやって、また、さわってしまいます。きょうもねえさんのきれいにぬったぬりえを、めちゃくちゃにし、ねえさんのたいせつな十二色のいろえんぴつをばらばらにし、ねえさんのぶんのおやつにまでてをのばし、あさから、もう　三回も　あたまを　こっぴどく　たたかれました。「もう　いもうとなんて　いらない。うちから　おいだして！」

おやつのあと、おかあさんが　いいました。「わかこちゃん　いま　おそとは　あめがすごくつよくふっているわ。でも、おかあさん、どうしても　かってこなくちゃならないものがあるのヨ。おおいそぎでかえってくるから、なほちゃんと　おるすばんしていてくれない？」

「ええー！　いやあよう。だって、さみしいもん」

『いまのじかんは、だれもやってこないし、かぎをかけておくし、それに、ほんとにすぐ、かえってくるから」
「てれび　つけてもいい？」
「さみしいならいいわ」
「おかし　かってきてくれる？」
「いいヨ、じゃ、いいのネ？」
「うん。」
こうしておかあさんはでかけました。げんかんのドアをあけると、おそとの雨が、みえました。つめたいかぜと、ポツポツが、さアッと、ふりこんできます。ねえさんは、あわてて　しめました。
「なほちゃん　おいで」
ふたりは、てをつないでいって、テレビをつけました。どこのチャンネルをまわしても、おとなのばんぐみでした。
「なほちゃん、つみきしようか。」
ねえさんは、つみきを　もってきて、おうちをつくりはじめました。
「ほーらおうちだよ」

あと、ひとつで、できあがりというとき、いもうとは、てをふりまわしました。おうちは、ガラガラとこわれました。

「アーア」

いもうとは、にこにこわらっています。

「あああ……」

かおを　みあわせて　いっしょに、

「アーア」

「じゃ、なにか　ほかのことをする？」

ねえさんも　にこにこしながらいいました。ねえさんは、おりがみとシールをもってきました。いつもたいせつにしまってあるシールです。

「おりがみに　ぺったんぺったん　はって　あそぼうか」

いもうとは　おやおや　おててや、あしにまで　はってしまいました。

「ああ　だめよォ。そんなところにはっちゃ。……でも、それも　おもしろいね。」

ふたりは、かがみをみながら、おけしょうです。

「えへへっ、ふふふっ。おもしろいね。」

「きゃっきゃっ」

そのときです。おそらが　きゅうにくらくなりました。ゴロゴロ、ピカッ！　おおきなおと！かみなりです。きっとちかくに、やってきているにちがいありません。

バリバリ！

「きゃあーっ！」

しがみついたのは、ねえさん。いもうとは、……にこにこしています。

「おかあさん。まだかなァ」

あめも、はげしくなったようです。

きゅうに　でんわがなりだしました。

「リーン。リーン。リーン。」

ねえさんは、いままでに、あんまり、なんかいも、でんわにでたことは、ありません。いつも、おかあさんがいたからです。どうしょうかなァ。もし、し

らないひとだったら……。
「もしもし」
「……はい」
「あァ　わかちゃん。おばちゃんだけど、おかあさん、いる？」
「ああ　おばちゃん。」ほっとしました。
「おかあさん　いない」
「どこへいったの？」
「おかいもの」
「じゃ、おるすばんしてるの？」
「うん」
「ひとりで？」
「なほちゃんと」
「ヘェー、えらい、えらい。じゃ、あとでおでんわするから、おかあさんが、かえったら、そういってね。」
　でんわは、きれました。うちのなかは、てれびのおとだけが、ひびきます。
「なほちゃん　おいで。」
ねえさんはいもうとを　ひざにのせて、えほんをひらきました。
　そのとき、ピンポン、おかあさんが　かえってきたようです。
「おかえりなさい」
おみやげは、マシュマロでした。ふわふわしていて、おくちにいれると、あまーく、とろけて、おいしいこと。おくちいっぱい、ほおばって、ごくっと、おちゃでのみこむと、こんなおいしいマシュマロは、はじめてたべたきがしましたって。

（主婦）

若いお母さんたちへ

支えられての子育て

はるにれの会　佐野　恵子

我家は六人家族です。夫と私と、四人の子どもたちです。毎日、賑かに暮しております。現在、長男十歳、長女九歳、次男五歳、次女四歳です。よく人に、「四人いらっしゃるんですか。今どきめずらしいですね。」と言われます。私は、学生時代から、自分のこと、子どものことを考えるのが好きでしたから、四人位子どもを生み、自分の手で育てられたら楽しいだろうな…という単純な願望が、そのまま実現してしまったのです。それにしても、十年以上もの長い間、子育ての時期を過してきて、専業主婦の陥りがちな、閉塞的状況にもならず、学生時代からの感覚を持ち続けながら、安定した気持で、子育てができたことを、とても感謝しているのです。そうすることができたのは、やはり多くの人々に支えられてきたからだと思うのです。今日は、私の子育て時代を支えてくれた人々のことを書いてみたいと思います。

最初に思いうかぶのは、結婚前から行なっていた、ある地域の、知恵遅れの子たちと、その家族の人たちの、自主的に作った交流の場（めだかの学校）に、細々なり

とも、つながりを持っていたことでした。その会の、保育責任者として、週一回、第二子が生まれるまで参加していました。それでも、大きなお腹をして、一人をおんぶして通い始める頃から、責任者らしいことは、何もできずただ行って、お母様たちと雑談してくる…という日日になってしまいましたが、それでも、私のことを「校長先生」とひやかし半分に言いながら、共に生きて行きましょう…という、いわば、運命共同体のようなものに育ってきていて、逆に、私が、励まされ続けていました。第二子が生まれて、転居しました。片道二時間もかかる所でしたので、めだかの学校も、月一回、日曜日の集まりとなりました。

当然、専門外の夫も引っぱり出されるようになり、親子四人で、遠出をするようになりました。と同時に、めだかの学校のお父様たちも参加されるようになり、ボランティアの人たち、スーパーバイザーの先生たちも含めて、いろいろな立場の人たちが友好を深める、楽しい場になっていったのです。第三子が生まれてからは身動きできなくなり、年一回のキャンプ、クリスマス会、その他、不定期な集まりになりましたが、家族ぐるみのおつきあいは続いて行きました。我家の四人の子どもたちの成長を、楽しみにして下さる人たちに支えられて、子どもたちは大きな力を受けていると思うのです。また、私もこのような集まりに参加し続けることができて、とても幸せでした。

家庭に入っても、細々なりとも外との関係を持ち続け、何かしら役割を持つことは、とても大切なことだと思うのです。そういう意味でも、『遊びを見つめる会』の主催者が、なかなか書けない私を見放さずに、励まし続けて下さっていることにも深く感謝しているのです。更に、近所のお母様たちにも随分お世話になりました。上の子たちの幼稚園の送迎を、心よく引き受けて下さったり、外出の大好きな次男を、よく遊びにつれ出して下ったり、協力しましょう…という温かい雰囲気がありました。このように、私はとても恵まれた環境で子育てをしていたのですが、それでも私には、とても気持の重い

事がありました。

高校時代、高校の事務のおばさんが、私に一枚の写真を見せてくれました。それは、娘さんがお孫さんに授乳している写真でした。大きくて、豊かな、美しい乳房に、私は魅せられてしまったのです。私もこの写真のようなお母さんにいつかなりたい…。そして、ミルクで育てている人を見ると、なんと怠慢な親だろう…と見下す、高慢な私にもなっていたことに気づかなかったのです。そして、待ちに待った赤ちゃん。さあ、母乳で育てよう…と意気込んでいたのに、二五〇〇グラムの小さな赤ちゃん。元気もないので、母乳はだめ。母子同室の施設でありながら、ほとんど新生児室で監視させられる…ということになり、一生けん命お乳をしぼっては、帰って来た時に授乳しようと必死でがんばっていたけれど、「そんな程度の量では、母乳だけで育てるのは無理ですよ。」と医者に言われてしまったのです。次第に、私自身がおかしくなってしまって、人に会うと涙が止まらず、泣いてばかり…という大変不幸なスタートを切ったのでした。

私にとっては、全く予想外のことで、現実を受け入れるのに、随分苦労しました。

第二子は絶対に元気な子を…と挑戦し、念願かなって母乳でスタートしたのですが、三ヵ月程で限界。第三子は母乳にこだわらないでリラックスして…と心がけて、スタートは順調でも、二ヵ月半位で限界。あとは、混合になってしまうのです。母乳哺育に成功した人の話を聞いたり、本で読んだりして、次はこの事に注意して…とやってきたのに、ことごとく長続きしないで、早々にオッパイにさよならを言わねばならないことは、私にはとてもつらいことでした。そして、ついに少し前までの高慢な自分を反省しました。

更に、第四子の出産を真近にして、まだ、あきらめきれない私でした。実は、第三子が生後二ヵ月半位の時、ある月刊紙に、伊那保健所長で小児科医である小林美智子先生が、桶谷式母乳哺育のことを紹介していたのです。桶谷という助産婦さんの考え出した手技によって、多くの母親が、母乳に成功していること。また、食事の

とり方も含めた母乳管理が、従来の方法と違うことも知ったのです。しかし、桶谷さんは富山県の方。他の兄姉たちを残して、幼い子をつれての長旅は自信がなく、無理する程の事でもない…とあきらめてしまったのです。

第四子で同じ悲しみは味わいたくなく、また、自分の力ではどうすることもできないと悟ってしまったのですから、せっぱつまった思いで、予定日一週間前になって、その女医さんに手紙を書いたのです。「どんな遠くでも、でかけて行く覚悟でいますから、どうぞよろしく。」と書き添えました。すると、数日後に、本当に間もなく返事の手紙が届いたのでした。それには、「必ず成功するので大丈夫。出産後に、近くの上手な手技者を紹介するので、安心してお産をするように。」との内容でした。うれしくて、感激の涙が溢れてきたことを、今でも忘れません。出産に関しては良い医者に恵まれなかったので、やっと本物の臨床家に出会えたよろこびも忘れら

れないことです。そして、生後一ヵ月程して、桶谷先生の第一の弟子ともいえる有能な若い手技者を我家に派遣して下さったのです。後で分かったのですが、とても多忙な方で、家にまで来て下さるのは、ごく例外的なことだったのです。私の必死な願いが通じたのでしょう。小林先生は、私に、最善を尽して下さったのです。そして、手技をしていただいた結果、よく出るオッパイであること、生活を整え、食事を改善し、おいしい母乳にするために、手技を定期的に受けていけば絶対に大丈夫、と大鼓判を押してくれました。私は本当に安心しました。この時「私もやっと、一人前のおばあちゃんになれる…。」と心の中で叫びました。大昔から伝わる母性の血が、トクトクと私の体の中に流れ始めたような気がしました。学生時代棟方志功さんの講演を聞いたことがあるのですが、「本当に心から願うことは、必ず実現できる。」という、印象深い言葉が、その時蘇り、本当の言葉だったことに思いを深くしたのです。更に、第三子の時、あの月刊紙に出会った頃お茶の水の主婦の友会館で、弟子たちが開業し始めていたとのことを知り、一歩踏み出していればその子から母乳哺育が可能だったことを知り、浅はかな判断で、無理だと決めつけてしまったことを深く反省したのです。更に最初の子から可能だったら…と、上の子たちに申し分けない気持でいっぱいになりましたが、もし、そうであったら、年子で生まれて来ている我家では、今のような兄弟姉妹関係は生じていなかったわけです。やはり、与えられるべくして与えられためぐりあわせだったのだから、過去の事は、問うてはいけないと思いました。しかし、良いと思えたことは、それがどんなに手の届かない遠い存在に見えても、無理だと決めつけないで、門を叩いてみると、意外にも道が開けていることを実感したのでした。私のこれからの良い教訓にしたいと思いました。

ところで、四人もいる中で、桶谷先生のおっしゃるように、昼夜三時間おき授乳はとてもきつく、また、一歳五ヵ月の違いの次男は外が大好きで、ちょっとの間に、外に出てしまうので、ゆっくり授乳できない旨を、小林

先生に訴えると、「母乳哺育を楽しみなさい。どんな優れた理論も、楽しまなければ意味がないんですよ。公園に皆ででかけて行って、そこで子どもたちを遊ばせながら授乳すればいいんですよ。どこでも、気軽に、飲ませることができる、そこが母乳の良いところなんですよ。」との答えが返ってきました。あまりに一生けん命になりすぎて、楽しむ余裕がなかったことを反省したのです。

その頃、長女の幼稚園のお迎えは、毎日の一仕事でした。降園後の三十分は、園庭で遊んで良いことになっていたので、子どもたちは大よろこび。次男もお姉さんたちと一緒になって、遊びに興じているのです。それを園庭の隅で、末娘をおんぶしながら見ているのですが、時間が過ぎても帰ろうとしないし、先生も大目に見て下さるので、私も腰を据えて授乳。喜々として遊ぶ子どもたちを見ながらの授乳は、楽しいひとときでした。また、長男の学級懇談会などにも、気軽にでかけて行って、話しを伺いながら授乳…ということをよくしました。この頃、子どもたちが、繰り返しこんなことを言っていました。「最初に、お兄ちゃんがオッパイ飲んで、次がお姉ちゃんで、その次があきちゃんで、その次がまきちゃんでしょ…。お母さんは、おばあちゃんのオッパイ飲んで、おばあちゃんは、ひいおばあちゃんのオッパイのんで…、それから、ひいおばあちゃんは誰れのオッパイ飲んだの？」また、誰れのお腹から誰れが生まれたのか…その順番は…という問いかけが、特に上の二人の関心事でした。

こうして、私にとっては、大変忙しく、またとても充実した一年半が過ぎ、いよいよ断乳の日。たっぷりと、おいしい母乳を飲ませた後、両乳房に、へのへのもへじ、を書いておき、次に欲しがった時胸を開けて、この絵を見せるのです。断乳は方法、時期共にいろいろなやり方があるのですが、これは別問題として、私もやってみました。いつものように、「パイッ」と言って、小さな手で私の胸を開けて飲もうとしましたので、思いきり大きく胸を開けて見せてあげました。本人がキョトンとしている中で、そこに居合わせた他の三人の子たちが、

一斉にその絵を見て、大笑いを始めたのです。「何これ？何なの？…。」とゲラゲラお腹をかかえて笑っているのです。何がなんだかさっぱりわからないまま、末娘はしばらく不審そうな顔をしていましたが、ついに皆につられて笑い出し、最後は自分で私の胸の上にあった服をおろして、幕引きをしたのでした。それから数回、そのグロテスクな絵を見たがりましたが、決して欲しがりはしませんでした。母子共に、最愛のオッパイとの劇的なお別れを皆でゲラゲラ笑ってすますことができたことを、うれしく思いました。そして、上の三人の子たちも、同じように育てられたと頭の中では信じて育つでしょう。もし大人になって、本当のことがわかった時でも、最初のぎこちない育て方も、願いは同じであったことで許してくれるだろうと思っているのです。小林先生の登場は、子育てを無上に楽しいものにしてくれました。

ぎごちない育て方といえば、最初の子はどうしても『私が育てる…』と意気込みやすく、二番目の時もこんな育て方で良いのだろうか、他の子と比較してこの程度の育ち方で良いのだろうか…と心配する一方で、二人を人に預けて、何かやりたい…という母のみの欲求も押えきれないでいるのです。が、三番目の子が生まれたとたん、身動きできない自分を感じました。三人もの子どもが私を必要としている。それに専念することは大変意義のあることだと思えたのです。更に、三人が成長するにつれて、同じ親の子なのに、三人三様の違った個性を持っているのに気づかされ、その子なりに育ちゆく姿を素直に受けいれようという気持になりました。

私は、三人目でやっと母親になれた、と思っているのです。今の時代、三人以上の子を持つのは、なかなか許されないことかもしれません。母性を素直に開かせにくい時代であるけれども、「私が、私の力で…」という気負いを捨てて、もっと大きな力、より良く生きようとする人間本来の力を信じて、子育てをしたい、また、していって欲しいと願うこの頃です。

最後に、人が育つ上で、自然の力もまた重要であることを忘れてはならないと思います。一本だけ空高く伸び

て咲く桜の古木を見て、「涙が出ちゃう!!」と感激する娘。夕暮れの散歩が大好きな子どもたち。夕暮れの空の色、程良い風に誘われて、気持も静かになるから不思議です。また、暖かな光が降り注ぐ午前中に、下の二人が我家の庭の真中にデンと作った少し大きめの砂場で、黙々と砂いじりをしている。話すことさえ忘れて、ひたすら無心に、砂に熱中している。その傍らで、私は洗濯物を干している。静かな時が流れている。ふと手を休め、まわりの山々を見上げると、大自然の中で、母と子と共に生かされているという思いに、深く頭を下げたくなる時があります。

多くの人に、自然に、支えられて、母も子も育つのだと思います。そういう育ち合いを大切にしたいと思います。まだ子育て真最中ではありますが、何かと心配の種だった長男も自分らしさを発揮し始め、今、大きな山を一越えして、ちょっと休憩しつつ、越えてきた山を眺め味わっている、といった気持でいます。これからもまた山を越えねばならないだろうと思いますが、多くの人に支えられていることを忘れずに、自分らしい歩みを続けていきたいと思います。また、これから続く若いお母様たちを、少しでも支えてあげられる人になれるように努力していきたいと思っています。

雑誌の仕事を始めてから、半年余りになる。現在、四誌と仕事をさせて頂いているが、それぞれの雑誌が求めるものが異なり、原稿に向かう毎に、頭をかかえてしまう。一体、この編集者は、私に何を求めているのだろう。その問いが頭の中にふくれ上がり、一向に筆が進まぬ内に、〆切りが迫まってくる。いくつかの原稿が一時期に〆切りを迎える時ほど、苦しい時はない。書かなければならないという使命感、義務感と、何故、原稿を受けてしまったんだろうという後悔が、いり混って、圧迫感を与える。

やっとの思いで書き上げた原稿が、編集者の意向に合わなかったり、スポンサーからクレームが付いたりして、書き直しをしなければならない時は、多い。そんな時、自分の文章の甘さと表現力の乏しさを思い自己嫌悪に陥ってしまう。自己満足の文章でなく、わかりやすく、しかもある種の圧力、説得力を持つ文章を書けるようになりたいと思うが、なかなかその希望は達成できず、よく練れていない文章のまま編集者に渡してしまったりする。多くの場合、それは書き直しとなる。一回、二回を書き直しする内に、やっと先が見えてくる。一つの原稿をし上げる時、それは、無から有を生む苦しみだ。

しかし、自分の文章が活字となり、印刷され、多くの人々の目に触れる喜びは忘れられない。ただ、それだけのために私は、書く苦しみに耐えているのかもしれないと、書店の店頭で思う。

一つの課題を編集者から与えられ、それに取り組む時、ごく日常的な事物も、見る角度を変えたり、切り込み方を変えることで、様々な物が見えてきたり、また、全く新鮮なものへと変様するのは、面白い。

しかし、いい文章とは、本当に苦しいものだ、とつくづく思う。（誉）

幼児の教育　第八十四巻　第十号
十月号　©　定価三五〇円
昭和六十年九月二十五日　印刷
昭和六十年十月一日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本田和子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九—一九六四〇番

◉本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

＊万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

私立幼稚園の昭和史

こぼればなし

青柳義智代・著

私立幼稚園の歴史を語り、隠れたエピソードをも今ここに明かす！

私立幼稚園の発展のために生涯をつらぬいてきた著者は、即日本の私立幼稚園の歴史であることは万人の認めるところです。本書は、その歴史を振り返るとともに、表面化しなかったさまざまなエピソードをまじえて事実を綴っています。私立幼稚園の発展を理解する上で重要な書です。

B5判・128頁・定価1,300円

<わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

障害児保育実践シリーズ〈全6巻〉

大場幸夫・名倉啓太郎・村田保太郎・森上史朗　編著

A5判・セットケース入り・各巻平均264頁・セット定価10,800円

- 第1巻 ／ 自閉的な子どもと保育
- 第2巻 ／ 発達に遅れのある子どもと保育
- 第3巻 ／ ことば・聞こえ・見ることの障害と保育
- 第4巻 ／ 病虚弱・肢体不自由の子どもと保育
- 第5巻 ／ 心に問題をもつ子どもと保育
- 第6巻 ／ 障害児保育の基礎

障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか？

♣いま、保育現場では、望ましい障害児保育について真剣に模索されています。

♣症状も程度も多岐にわたる障害児の姿を十分把握し、一人ひとりの個性を見きわめて保育することが大切です。

♣このシリーズでは、実際例をたくさん出しあって、なにをどのように指導したらよいか、具体的に考えていきます。

♣また、実践者との座談会を随所にとり入れ、現場のナマの声を通して保育者にとって必要な問題点を探っていきます。

♣たんなる理論書や研究書ではなく、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。

♣豊富な事例、適切な助言、イラストも多く読みやすいこのシリーズは、きっとお役に立ちます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館